



# HOKKAIDO UNIVERSITY

|                  |                                                                                   |
|------------------|-----------------------------------------------------------------------------------|
| Title            | 統計学＝社会科学方法論説の擁護：ドゥルジーニン批判の吟味                                                      |
| Author(s)        | 大橋，隆憲                                                                             |
| Citation         | 北海道大學 經濟學研究，12，25-76                                                              |
| Issue Date       | 1957                                                                              |
| Doc URL          | <a href="https://hdl.handle.net/2115/31034">https://hdl.handle.net/2115/31034</a> |
| Type             | departmental bulletin paper                                                       |
| File Information | 12_P25-76.pdf                                                                     |



# 統計学 — 社会科学方法論説の擁護

—— ドゥルジョーニン批判の吟味 ——

大 橋 隆 憲

まえがき

- 一、見地問題明確化の意義
  - 二、ドゥルジョーニンの見解、その批判と反批判
  - 三、オ報告前の方法論説批判
  - 四、プロシニコの見解と私見の要約
  - 五、オ報告後の方法論説批判と実質科学説
- むすび

まえがき

統計学の基礎に、統計学を数学や経済学とわかつところのそれ自身の基礎に、社会集団論を据え、社会集団論を統計学の諸問題を捉える統一的視点となしたのは、おそらく Georg von Mayr (1841-1925) であろう。マイヤは、「統計学はその独自の対象として社会集団をもち、その独自の方法として集団観察法をもつ。それは社会生活の合法性

を追求する「一個独立の社会科学科である」とする。この統計学Ⅱ実質社会科学説の見地が、統計学の対象と規定している社会集団を、統計方法の適用対象に転位せしめ、統計学の対象は専ら統計方法であるとするのが統計学Ⅱ社会科学方法論説の見地である。日本においてマイヤの社会集団論に基づく統計学Ⅱ実質社会科学説を批判し、統計学Ⅱ社会科学方法論の見地に到達したのは蜷川虎三博士であつた。私もこの統計学Ⅱ社会科学方法論の見地に追隨するものであるが、見地問題は研究の前提であると共に帰結でもある。したがつて時にこの問題に立ち帰り、反省を重ねるのも有意義である。

私見は現在のところ、ソヴェト統計学論争の公式的結論が、統計学Ⅱ社会科学論の見地を正しいとしたにもかかわらず、それは論理的に維持しうるものではなく、ブルジョア社会で支配的な、いわばすでに伝統的ともなつてゐる統計学Ⅱ社会科学方法論の見地を正しい、と考えている。

本稿の課題は、かかる見地を維持しうる所以を、ソヴェト統計学論争の経過とその後の展開を通して明かにするにある。私見は結局、ソヴェト統計学論争の結論は、現象的には、統計学Ⅱ社会科学説におちついたごとく見えるが、本質的には、統計学Ⅱ社会科学方法論説の確認であつた、とする。したがつて私としての今後の課題は、かかる見地に関する抽象論議は一応決着したものとし、自らの見地において、具体的な問題と取り組むことにある、と考えている。しかしながら、見地問題の整理になお若干の作業を要しよう。

## 註

- (1) 蜷川虎三、統計利用における基本問題、一九三三、一三六頁以下。これに対し、杉榮、蜷川博士の G. von Mayr 批判の批判、(杉榮、理論統計学研究、一九四〇、三一九頁以下)がある。なほ、蜷川博士の統計学Ⅱ社会科学説批判の論点は、蜷川虎三、経済統計論の性質に関する考察、統計学研究・第一巻・一九三一、一一九五頁。蜷川虎三、統計学概論、一九三四、三二一—三二四頁、にくわしい。

## 一、見地問題明確化の意義

戦争直後の時期のソヴェト統計学界が当面した理論上の主要課題は、統計理論における形式数理主義的傾向の批判克服であつた。統計学においてこの傾向が強いが故に、統計学は実践指導性を失つていとされた。この傾向批判の論点は、(1)統計学の対象は、集団現象一般か、それとも集団的社会現象にかぎらるべきか、(2)統計学の方法は、数理統計学の方法か、それとも社会科学的方法か、(3)統計学の基礎は、大数法則と確率論か、それとも史的唯物論と経済学か、という三点であつた。一九五二年を中心に右の論点についての諸家の見解が定式化され、見地はほぼ、普遍科学の見地、社会科学方法論の見地、実質社会科学の見地の三つにわかれた。一九五四年三月の統計学についての学术会议とその結論(五月)は、統計学Ⅱ社会科学説を正しいものと認めた。つまりオストロヴィチャノフ報告(以下オ報告と略称)は、(1)統計学の対象は集団的社会現象の量的側面であり、(2)統計学の方法は集団観察、グループわけ、総括指標等であるとし、(3)統計学の基礎は史的唯物論と経済学である、〔43〕(以下、カギ、カッコの番号は稿末文献番号を示す)とした。この見地が科学性をもちうるための必要要件は、この見地の理論が、(1)実践指導性、(2)現実反映性、(3)理論的整合性を確保しうることである。

統計学Ⅱ社会科学の見地の理論が、かりに(1)(2)の要件を満足したとしても、もし(3)の理論的整合性を確保しえぬならば、科学性はそこにおいて破れる。この意味において統計学Ⅱ社会科学説は問題を残している、と私は考える。それは、統計学を独立の実質社会科学とした場合、経済学と質的に、いかなる点において区別しうるかである。オ報告後の統計学Ⅱ実質社会科学説が、理論的に解決をせまられている点は、まさにこの一点にある、と私は考えている。

統計学Ⅱ実質社会科学説は、オ報告後の著者たちによつて、そのテキストでいろいろ解説されているが、私見に

よれば、統計学と経済学の対象の質的区別の問題の理論的解決に未だ成功していない。これは論理的整合性ということに抽象的次元における問題であるが、その次元のいかんにかかわらず、科学性保持の必要要件である。この一点から私は、統計学Ⅱ実質社会科学説に組しえない。

統計学を実質科学と考えるか方法論と考えるか、というような考え方の確定は、何のために必要とされるか。これは統計学自体の具体的内容の問題というよりは、その前段階的な問題である。かかる問題に対し何が故にソヴェト統計学論争のような、あのような大きなエネルギーを消費せねばならなかつたのか。

才報告は次のごとくべている。すなわち、「統計理論が共產主義建設の諸要求から立ちおけているが、その原因のひとつは、ソヴェト統計学者のかんりの部分に、統計学の内容について、とりわけ対象と方法、および、その出発点となる理論的基礎について、あやまつた考え方がひろまつていることにある」〔43〕（五七頁）と。この報告によれば、統計学の対象を私見のごとく「統計方法」とする考え方は誤つた考え方、有害な考え方に属する。そしてその誤りであり有害である所以は、「理論統計の領域での科学活動が、社会主義建設の現実的問題と無関係な、抽象的な方法論上の題目にかざられる」〔43〕（五七頁）からであるとする。

ソヴェト統計理論は、労働者階級が権力者たる条件下における理論であり、われわれの統計理論は、労働者階級が批判者たる条件下における理論である。このように権力機構における労働者階級の位地の歴史的社会的变化は、統計理論の目標・方向を転倒せしめ<sup>(3)</sup>はするが、いずれの統計理論にせよ、実践的課題からの遊離は、誤りであり有害であろう。この点にかんずるかぎり才報告の指摘のとおりであると考ええる。しかし問題は、統計学Ⅱ社会科学方法論の見地が、実践的批判的課題からの遊離という誤りと害毒を、必然としていくかどうかにある。つまり問題は再び科学性の問題にかえり、統計学Ⅱ社会科学方法論の見地そのものは、(1)理論的整合性、(2)現実反映性、(3)実践指導性、を

確保しないのか、ということになる。

- (1) ソヴェト統計学論争の経過概略については、内海庫一郎、ソ連統計学の動向、「統計」一九五六、八月号、をみよ。詳しくは、統計研究会訳編、ソヴェトの統計理論Ⅰ（一九五二）、経済統計研究会訳編、ソヴェトの統計理論Ⅱ（一九五三）、有沢広巳編、統計学の対象と方法（一九五六）、オストロヴィチヤノフ、統計学にかなする論争の結果によせて、「統計学」第一巻第二号（一九五五、九月）、等をみよ。

この問題は単にソヴェト統計学論争がエネルギーを消費しているだけでない。歴史的にみてもすでに Graunt, Petty の理論自体の中に、「自然的」と「政治的」の対立の契機を含み、一九世紀初頭のドイツでは「数字」と「言葉」の対立に外化し、Mayr 自体も自らの理論の中で「形式的意味の Statistik」と「実質の意味の Statistik」になやみ、Mayr と Johannes Müller, Žižek と Meervant の論争のこと、Flaskämper の事論理と数論理、蜷川虎三博士の大量と解析的集団のこと、蜷川・郡両氏の論争のごとき、何れも統計学の本質観の問題である。

- (2) この点の若干の分析は、拙稿「西と東の統計学」（京都市統計月報、一九五三、六・七月号）でおこなった。

## 二、ドウルジーニンの見解・その批判と反批判

ソ同盟で統計学Ⅱ社会科学方法論説の代表的主張者は、ドウルジーニンである。これに対しオ報告は、次のごとく宣告する。「いかなる社会科学もその個有の対象をもつだけでなく、またその個有の研究方法をもつている」と。先ずこのような前提命題を立てこれを特殊に適用するという形で三段論法的に押し切り、「このような主張に同意できない」（43）（六三頁）と。この論理が正しくあるための条件はいうまでもなく、先ず第一にその前提命題が正しくなければならぬ。次にその思考過程が正しくなければならない。対象は対象であり、方法はあくまで方法であつて、方法は対象となりえない、<sup>(1)</sup>と思ひこんでいる対象と方法の固定的断絶観は、非弁証法的思考様式というほかない。対象と方法の両項間に否定を媒介とする運動の可能性を認めぬオ報告の思考様式の分析・批判は、興味ある問題である。

しかし本稿ではこの問題自体に立ち入る余裕がない。オ報告に至るまでのドゥルジーニン批判と、オ報告後におけるドゥルジーニン批判の展開をみるにとどめる。

ドゥルジーニンの統計学Ⅱ社会科学方法論説が明確に定式化されたのは、おそらく一九五二年の「経済学の諸問題」誌(以下Aと略記)(一九五二・第六号)における「科学としての統計学の内容について」[21]であろう。したがってこの時までのドゥルジーニン批判の論点は、この論文自体でドゥルジーニンがとりあげた批判者の論点整理を行なうことで足りる。

ドゥルジーニンによれば、「統計通報」誌(以下Bと略記)の諸論文に提示されている根本思想は、「統計学は社会経済関係だけを研究する社会科学である」と定式化しうる、と。この思想は、いうまでもなく、「統計学の対象は専ら集団現象であり、統計方法は社会現象にも自然現象にも適用しうる」(普通科学説)とする見解と対立している。ドゥルジーニンは統計学が社会科学に属するというかぎりにおいて肯定的であるがその根拠は、(1)統計学成立当初のその社会科学の性格、(2)統計学の現在における社会現象研究上にもつ重要意義、からだけでなく、(3)統計学それ自体の本質から社会科学である、としている。

それ自体の本質から統計学が社会科学であるという意味は、普通科学説の支持者たちの念頭にある「統計学」は実は「数理統計学」である、ということである。数理統計学も統計学も共に個体ではなく集団(事実の総体)を扱う点においては共通である。しかし数理統計学はその集団の構成要素が単純で単一の標識をもつところの集団(集合と呼ぶに適する)を、偶然的過程における大数法則の発現(偶然誤差相殺)を、前提している。これに対して統計学はその存在する集団の構成要素が相互に関連し、多様な標識をもつところの社会集団を、社会的発展過程における社会的合法則性の発現(社会的要因は偶然誤差として相殺除去さるべきものではなく、まさにその逆)を前提している。こ

の意味において、統計学は数理統計学と明確に区別さるべきであり、その基礎は大多数法則や確率論でなく、史的唯物論と経済学である。以上のかぎりにおける統計学は社会科学説をドゥルジーニンは先ず肯定し、普遍科学論者の「社会・経済概念」の混乱を指摘する。

要するにドゥルジーニンは、(1)統計学は社会科学である。(2)統計学の基礎は史的唯物論と経済学にある、という点については、これを承認する。しかしながらドゥルジーニンは、統計学は実質社会科学説を承認するのではない。彼はその批判を通じて自己の統計学は社会科学方法論説を提示する。

その批判の第一点は、対象の質と量との関係の考方にある。ドゥルジーニンによれば対象たる社会の質的規定を経済学に、量的規定を統計学に分割配分することは、質的規定と量的規定の不可分の統一という弁証法的唯物論の基礎命題の一つを否定することを意味する、とする。ドゥルジーニンは理論的・経済学的一般化と具体的統計資料研究の有機的結合に統一を主張する。彼は質と量との分割配分を社会認識のいかなる過程においても、認識結果の組織構成においても、承認しない。

批判の第二点は、他の科学によつて確定された法則の「描写」に記述だけを事とする独立科学の存在を否定する点である。任意の科学が科学とよばれるゆえんは客観世界の法則発見につとめる点にある。科学の実質独立性はその科学が固有な法則をもつ点にある。統計学が独立科学であると主張しうするためには、単に経済学によつて確定された法則を描写するだけでなく、それ自身の固有の法則に統計的法則をもつことを認めなければならぬ。つまり統計学は社会発展の合法則性とは別個な、統計的合法則性を認めるか、それとも独立科学たることをやめるか、の何れかでなければならぬ(21)(三一、三五頁)。ドゥルジーニンは後者をとる。したがつてドゥルジーニンは、現象の質的分析と量的分析の完全な統一を主張しているから、経済現象が「数字的表現」を与えられても、それはやはり経済学の対

象としてとどまり、統計学の資産にならない(三二頁)、とせざるをえない。

かくしてドウルジーニンは、研究対象の質的規定性と量的規定性の統一を破らず、かつまた、社会の発展法則とは別個な特別な統計の合法性を定立せず、なおかつ統計学を社会科学のうちに位置づけるには、「統計学を無条件に独立の実質科学に昇格せしめる試みをやめ、統計学を社会諸科学が具体的問題の研究に際して用いる方法の科学と見なすことである。それが反弁証法的な誤った構想からぬけ出すただ一つの途だ」(21)(三五頁)と主張する。

以上がドウルジーニンの統計学Ⅱ社会科学方法論説の概要である。以下、ドウルジーニン自身がこの論文でとりあげた批判者の論点を、私自身の考察の便宜に従つて私自身の仕方において整理する。

〔論点一〕統計学Ⅱ社会科学方法論説は普通科学説の変形にすぎぬ。V.S. 一九五〇年第二号の巻頭論文「マルクス・レーニン主義統計理論のために」(3)は、「現在若干のソヴエト統計学者は、統計学の普遍性のテーゼを固守できぬので、方法としてでも、このテーゼを守る目的から、カウフマンのこの誤った見解に合流する傾向にある」(3)(三六頁)としている。なおエヌ・ミハイロフも「統計理論の二、三の問題について」(9)(三六七頁)において同様な見解を述べている。

これに対しドウルジーニンは、統計学を方法論と認めることが、普遍的統計方法論(数理統計学)の考と必然的に結びつくとはかぎらない、と反論する。社会科学方法論としての本来の統計学と、自然科学で利用される数理統計学との間の根本的相異は、すでに示したとおり、方法の成立・適用の客体たる研究対象そのものの本質の相異から生れているのだから(21)(三八頁)と反論する。

私見によれば、ドウルジーニンの見解は、もともと普通科学説(その見地における方法論説が数理統計学)の否定の上に立てられたのであるから、ドウルジーニンの社会科学方法論説批判を普通科学説批判を以つて間に合わせるわ

けにいかない。もつとも、ドゥルジニン自体に着目すれば、同一人たるドゥルジニンの主張が、数理統計学から社会科学方法論説に形態変化したにとどまる。とくにドゥルジニンの「統計学講義」〔44〕の内容からすれば、ドゥルジニンに対するかうした批判は当然である。これについては後述する。なお注目すべきは、ドゥルジニンが論敵を反批判するときは、「対象論理」を用いているということである。

〔論点二〕 統計学Ⅱ社会科学方法論説は具体的な社会経済的内容を抹消する。ストルミリン「科学としての統計学」の定義にかんする問題によせて「10」は、「統計学の対象を統計方法とする対象規定では、統計学はその具体的社会経済的内容とその実際の意義を失なう。もつと悪いことには、この理論家達は普遍主義に夢中になり、その方法は数字によつてのみ規定されると主張したり、また、事実上その方法は統計方法から純数理的方法になつて」と主張するに至る〔10〕（三三頁）と云つてゐる。

ドゥルジニンはさきに、経済現象が「数字的表現」を与えられても、それはやはり経済学の対象としてとどまり統計学の資産にならない。とのべた。それでは、統計資料による現実の社会科学的分析を実質社会科学の側に引きわたり後に、統計学に残る資産は何か。「方法論的に意義のあるもの」だけである。ドゥルジニンによれば、「統計は国家管理の用具として発生したが、その発展過程において、きわめて広範囲な複雑化したところの、社会経済現象の数字情報の蒐集と加工の学問に転化した。統計学は、計測器具の使用規則と比べて、知識の一定の体系を備えている」という意味で、一つの事実上の学問になつてゐる。この知識の体系から統計理論もまた生長したのである」〔21〕（三九頁）という。つまりドゥルジニンによれば歴史的事情からするも、理論的本質からするも統計学は統計方法過程の分析論にとどまるべきで、慾ばつて経済学の内容を侵略すべきでない、とする。

〔論点三〕 統計学Ⅱ社会科学方法論説は、統計方法をもつてひそかに唯物弁証法におきかえる。コズロフは「統計

学の対象と方法の問題によせて」〔20〕で云う、「統計学を方法の科学であるとする主張は、正しいとは認めえない。その理由は、現実の科学的認識方法である唯物弁証法を、統計方法によつておきかえることを意味することになるであらうから。この見地は、方法が対象とは無関係に、それ自体で存在しているとみることから出発しているが、實際上、方法は対象の種類によつて定まり、対象の特質に依存している。」〔20〕（四頁）と。

これに対しドゥルジーニンは、「唯物弁証法はすべての科学に共通な認識方法であるが、それぞれの科学は、唯物弁証法に基づくそれに個有な諸方法をもっている。統計もこうした方法を意味している。コズロフのように、統計を方法とみる見解が、方法は対象とは独立に無関係に存在しているという考えから出発している、と見なすのは全く誤解であらう。」〔21〕（三九頁）と反論する。

ドゥルジーニンがその論文でとりあげている批判者の論点は、以上の三点である。これに対してドゥルジーニンは総括的に次のごとく反批判する。「統計学を方法の科学として認識することは、統計学を解消する傾向をもたらしものではけつしてない。統計学のもつ大きな実践的意義は、統計を社会諸科学が具体的諸問題を解決する際に用いる一つの手段とみることによつて、すこしも弱められはしない。これに反して、統計学を独立の実質科学の地位に無条件に昇格させようとする試みは、必然的に形式主義的諸構想を立てざるをえなくなる。」『統計通報』誌上の論者の主張している統計学の内容についての見地は、統計学の現実の科学的基礎の解明にすこしも役にたちえない」〔21〕（四〇頁）と主張した。

- (1) この問題は日本では既に早く、戸坂潤、科学方法論、一九二九、によつて論究されている。なお、ドゥルジーニンを含めて同盟における論者の論理の形式主義的傾向についての私見は、拙稿「西と東の統計学」『京都市統計月報』一九五三、六・七月号、のべた。

(2) ストルミリンは統計学と経済学の差異を、前者のより大きい具体性にみている。つまり両者の区別を抽象段階の区別によつて「10」(三三頁)。なほこの点はストルミリン他編「統計学」〔51〕においても現われる。

### 三、才報告前の統計学Ⅱ社会科学方法論說批判

統計学Ⅱ社会科学方法論說に対する批判が、前節提示の論点から、深さと広さにおいてその後だけ進展したかこれがここでの問題である。便宜上、論点は前節からの通し番号で整理する。なお、主要と思われる批判者の論文を大体において発表順に拾つてゆく。

ホルンジューは統計学Ⅱ普通科学說の見地からドウルジーン説に反対する。その云うところは、「統計によつて確定された同じ事実、社会科学によつても自然科学によつても研究される場合がきわめて多い。その同一の事実を、ある場合には統計学と呼び、他の場合には数学と呼ぶのは論理的でない。したがつてドウルジーンンの提案のように統計を数学と社会科学に分割することは誤りであると思う。それは不可避免的に、自然科学における統計の形式・数理的取扱いとなるからである」〔22〕(五九頁)と。そしてホルンジューは、社会科学における無対象な統計方法論の内容がどうなるかを心配し、「確率論は数学でなく、むしろ Mathematik と Statistik の間にある統計学の基本的な中間形態であり、自然における(もちろん機械的運動における)事物の必然的な関係に対応しているものだ(六〇頁)と主張している。

自然科学の領域における統計の形式・数理的取扱いの検討は、原則として自然科学者の問題である、と私は考える。われわれとしては、統計学の基礎に確率論をおきうるか否かについて考えを確定しておけば足りる。そしてそのことはすでに検討済みとしているから、ホルンジューの批判をここでとりあげる必要はない。

ビザレフもまたドウルジーニンが「研究対象のない科学の概念を構成するという明らかに望みのない努力を試みている」〔23〕（六四頁）としているが、ラビノビッチの同様な批判〔26〕（二三三頁）と共に、「論点二」と同じと考えるから、改めてとりあげる必要はない。

ここで特にとりあげねばならぬのはチエルメンスキーのドウルジーニン批判〔24〕である。これはチエルメンスキーの「ソ同盟中央統計局統計技術学校用の統計理論にかんするプログラムについて」〔1〕に対するドウルジーニンの批判の反批判である。チエルメンスキーは、統計学の第一の課題はソ同盟の単一国民経済計算機構と統計観察法の研究であり、第二の課題は統計資料の分析方法の研究である、とする。そしてドウルジーニンが、統計学はそれ自身の対象をもたない社会科学の特殊方法論とすることに反対する。「ドウルジーニンは統計学を方法の科学に転化しながら、同時に、この方法は対象から切り離さるべきではないと声明している。これは統計学が、同時に対象を研究することなしには、方法論でありえないことを意味している。云いかえれば、統計学は自己の方法をもつと共に自己の対象をもつことを意味する。したがって統計学は社会諸科学のための方法ではありえない、けだしその方法は史的唯物論だからである。統計学は自己の対象をもち、したがってまた自己の資料をもつ。統計学は統計観察と調査によつてこれらの資料を集める。統計学は方法の科学ではありえない、なぜならば統計学は方法をそれ自体のために研究するのではなく、社会諸現象を分析するために、現実の一定の側面を研究するために方法を研究するものだからである」〔24〕（八八頁）と。

ここに「論点二・三」が表明されているが、チエルメンスキーの見地自体が、われわれの概念をもつてすれば統計学Ⅱ社会科学方法論の見地である。それは、統計方法がその適用対象（社会集団）によつて規定されるという正しい命題を強調し、方法が問題となる実践的動機を指摘しているものにほかならない。

〔論点四〕 統計学Ⅱ社会科学方法論説は統計資料を含みえない。チエルメンスキーは「統計学を社会科学の方法であるとする考え方は、統計学が自分自身の資料、自分自身の（統計的）事実をもつことの否定である」〔24〕（八七頁）としている。統計資料を統計学においていかに位置づけるかは論者の統計学観の性格を決定するものと云いうる。チエルメンスキーは次のごとく主張する。「統計資料は統計学の資料である。もし統計学が方法論にすぎないとすれば統計学は、その対応する統計資料」を提供することはできない。しからばこの「対応する統計資料」はいかなる科学に帰属すべきか？もし統計学さえその作成・加工を拒否するとせば、他の社会科学が拒否しうるのは当然である」〔24〕（九〇頁）という。

チエルメンスキーは統計結果たる統計資料を統計学の中核に据えることを主張する。そして統計学をまさに「統計資料によつて社会現象を研究する学問」としている。（チエルメンスキーの統計学の特質規定は次の「論点五」の項で示す。）これはチエルメンスキーをはじめとし、中央統計局の著者集団に認められる一般的傾向である。たとえば中央統計局著者集団（バストリコバ A. M. 編）の「統計理論」〔37〕は初版も再版もそのまゝがきで、（a）統計資料の実践的意義、（b）ソ同盟における統計資料の公表、（c）科学的に組織された系統的な調査、（d）資本主義社会での統計資料の意義と役割（1）ブルジョア国家にとり、（2）独占資本にとり、（3）労働者階級にとり、（4）をのべ、結論として、資本主義社会でも統計資料の意義は大きい、社会主義社会においてはじめて全面的発展の条件が作られる〔37〕（56、67）としている。統計資料を統計概念の中核に据えて統計学Ⅱ実質社会科学論を支えようとしている。

なお、チエルメンスキーの考えも同様であるが、中央統計局著者集団の「統計理論」は次のごとくのべている。「十分な科学的に基礎づけられた統計資料の創造のもつとも重要な条件は、統計的研究の正しい組織である」〔37〕（5.14）<sup>20</sup>。しかるに、統計局自体が科学研究機関であり、統計調査活動は科学的研究活動（経済活動や行政活動と異な

る認識活動」と考えられている。資本主義諸国における統計局の活動目的は専ら行政目的にあるに對し、ソ同盟ではそれが科学目的に従属していると考えられている。中央統計局とその機構は、「統計理論」と「統計実務」を體現した独立の科学研究機関・機構である、とのこの考えには注目を要しよう。そしてその「統計資料」は、その科学的調査研究結果Ⅱ統計結果たると共に、進んだ研究のための研究資料なのである。統計学Ⅱ社会科学方法論は、この重要な「統計資料」を含みえない、とチエルメンスキーは主張する。

〔論点五〕 統計学Ⅱ社会科学方法論説は現実の分析に当りえない。チエルメンスキーによれば、「方法の科学はいかなる仕方でも種々の時期、種々の国土における事実分析にたずさわらざるうか。方法論は事実分析にたずさわらないことは明白である。事実分析にたずさわらるものは言葉の本来の意味の科学、すなわち、自己の対象と自己の方法をもつ科学のみである。統計学はこのような科学である。これが統計学の第一の特質であり、経済学との第一のちがいであつて、統計学の本質は、経済学に基づき、種々の時期、種々の国における所与の経済現象を分析する点にある」〔24〕（九一頁）と主張する。

そして統計学の第二の特質は、現実分析の最も重要な形式の一つであるところの、現象の標識の決定と研究であつて、本質的な標識を選定しそれを表現するため対応する指標を定めることである。第三の特質は、任意の数列や指標を提供することにあるのではなく、諸現象の実際の型に、つまり経済的諸現象の型の形態に表現を与えねばならぬという点にある。第四の特質は、経済過程がそれを通じて実現されるいろいろな諸形態も研究する点にあり、第五の特質は、経済学の対象より広く、若干の上部構造の問題の研究をも含む点にある。問題の統計的研究はさらに進んで全面的な分析によつて定立された社会・経済諸関係の数字的描写に發展する〔24〕（九一—九四頁）と。

以上がチエルメンスキーの統計学の特質規定であるが、われわれの概念をもつてせば、統計学Ⅱ社会科学方法論の

内容指摘にほかならない。われわれもまた、成立基盤Ⅱ適用対象のない「方法」は成立しうる筈がないと考えている。このチエルメンスキの反論は、「方法論」を、成立基盤Ⅱ適用対象の側からの規定を軽視して、専ら「方法過程の構造分析・組織論」にとちこめるドゥルジーニンやプロシュコに対する批判として充分に意味をもちうる。しかし、方法の成立基盤Ⅱ適用対象（社会集団）を重視することは、統計学を実質社会科学に昇格させねばならぬことを意味しない、と私は考える。

〔論点六〕 統計学Ⅱ社会科学方法論説は社会生活における客観的合法性を否認する思想に根ざしている。コズロフは「統計理論の二、三の問題について」〔29〕においてドゥルジーニンを反批判する。ドゥルジーニンはその論文で反弁証法的な誤った構想からのがれる唯一の途は、統計学を独立の実質科学（客観的現実の合法性を確定する意味での）の地位に無条件に昇格させようとする試みを拒否して、統計学を、具体的諸問題の研究に当つて社会諸科学が用いる方法の科学とみなすことである」〔21〕（三五頁）と提案したのであつた。コズロフはこれを引用して云う、「ドゥルジーニンは科学の方法の問題においても誤つた見地を主張している。彼は統計を方法と云い、同時にその物質的性格を否認する。かくして彼は統計の方法の客観的性格をも否認する。……科学的方法はその認識価値にのみ還元さるべきでない。……レーニンは「単なる認識価値?? そして客観世界を反映せぬ?……不可知論!」と書いているではないか。ドゥルジーニンのこの提案は方法論的に根拠がないから拒否すべきである。なおこの提案は、彼が統計実務の利害を無視し、結局は他の諸科学の利害から発言していることからしても拒否さるべきである。統計学は他の独立科学と同様、その固有の研究対象をもっている。統計学が、質的側面と不可分に結びついた社会過程の量的側面を研究していることは疑いない事実だ」〔29〕（94頁）と主張している。

コズロフはドゥルジーニンの主張「社会現象の量的側面は独立の研究の対象となりえない、なぜならそれはつまり

は、対象の質的規定性と量的規定性の不可分の統一という弁証法的唯物論の基本命題に矛盾するからである」〔21〕（三〇頁）といふ主張に反対し、このような根拠に立つなら「数学」も認めえないことになる。けだし数学は対象から具体性と質的規定性を捨象して、対象の空間的諸形態と量的諸関係の研究にたづさわるものだからである、としている。コズロフによれば、ドウルジーニンが統計学を独立科学に昇格させることを拒否する基礎となつている思想は、社会生活の客観的合法則性を否認するブルジョア統計家の思想であるとする。

それは、社会は自然と同じく偶然の無秩序な推積であるとみなし、人間の意識のみがそこに一定の規則性を持ち込んでそれを整序しうるとみる思想である。統計学を自然発生的・偶然的諸過程の科学とみるブルジョア統計家は、内的・客観的合法則性なしですまさねばならぬところの対象・現象の無秩序な混雑の中に、人間意識がいわゆる規則を持ち込む助けとなる用具（手段・操作）に、まさにこの用具に、統計学の役割を割り振る、とコズロスはいふ。

コズロフによれば「統計学の対象についてのこの種の見解は根拠のないものであることは明白であるが、しかもなお二、三のソヴェト統計家によつて主張されている。まさにドウルジーニンもまたこのような根拠に基づいて、統計学を独立科学に昇格させることを拒否しているのである。現実存在しもしない架空の抽象的な「統計的合法則性」なるものに迷わされて、彼は事実を否認し、統計学は客観的現実性を研究するところの独立の科学ではない、という誤つた結論に達した」〔29〕（S. 48）とする。つまりドウルジーニンは、(1)客観的合法則性を予め実質科学（経済学）の側に移しておき、(2)同一の対象について幾つもの科学が成立することはないとし、(3)現実存在しもしない架空の抽象的「統計的合法則性」なるものを押し立て、(4)この架空の「統計的合法則性」と社会諸科学によつて用いられる「方法の科学」を同じ比重で二者択一の関係におき、(5)架空の統計的合法則性を否認するとみせかけ「方法の科学」を承認し、そのことによつて独立の実質社会科学としての統計学を否認し去る。コズロフはかくのごときものとして

ドウルジーニンの思想と論理のカラクリを指摘する。

このコズロフのドウルジーニン批判は、統計学Ⅱ社会科学方法論説を統計学Ⅱ普遍科学説の変型とみる〔論点一〕の内容にはかならない。コズロフは論敵を結局は、社会生活の合法則性とは別個の「統計的合法則性」の承認・否認へ追いつめて行く法論をとっている。オストロウモフはストルウミリンをカウフマン説へ追い込み〔13〕(264-26)、シウリギンはドウルジーニンを「統計学死滅の理論」へ追い込む〔15〕(266)が、これらは何れもコズロフ以下の単純な〔論点一〕型ということができよう。

〔論点七〕 統計学Ⅱ社会科学方法論は未決な問題を議題から外している。オウシエンコは方法論説は未決な問題を回避するものだという。オウシエンコのいう未決な問題とは彼によれば、「もし統計学に研究対象がないとしたら、それに定義を与えることも、その特殊性を明らかにすることも、それと他の科学の研究客体とを限界づけることも、すべていらなくなるわけだ」〔32〕(一四七頁)と。このような一般的命題を前置きすることは、問題点を見あやまらすおそれがあるが、オウシエンコのいわんとするところは、先づ第一に、方法論では「統計指標の本質」についての問題が除かれるというのである。

オウシエンコは次のごとく云う。「ドウルジーニンの意見によれば、統計学については指標計算の仕方・操作だけが問題であり、これらの指標が何を表現しているか、現実どんな内容がそれに対応しているか、それを客観的に算出しているかどうか、といったことは解明しない」〔32〕(一四七頁)と。つまり対象規定を捨象した統計方法過程それ自体の形式的規定だけでは、指標計算の仕方・操作だけでは、統計結果の現実反映の正確性と信頼性の吟味批判の基準を与えられない、というのである。全くオウシエンコの云うとおりであると私も考えるが、対象規定の方法規定における規定性の問題こそ、まさに統計方法の基礎論であつた筈である。

第二に、オヴシエンコが心配する点は、統計学が社会諸科学によつて使われる単なる方法であるとするならば、つまり特別の科学部門として存存しないとするならば、「統計実践とその必要に對して誰が科学的に奉仕するか、誰がその経験を一般化し、その前途を科学的に明示するか？ 経済学もその他の社会科学も、統計的実践の具体的な特殊な諸問題を解決するのはその任務でなく、各自の任務をもっている」〔32〕（一五二頁）と。そしてオヴシエンコは「統計学の課題は、実践的な統計活動を一般化する点にある。…そして実践活動の第一の直接の結果は、統計数字、統計指標である」〔一五三頁〕とし、また、「統計学の概念は、科学の概念一般がそうであるように、認識の結果であり、総計であると同時に、それは今後の認識、科学の前進のための用具として役立つものである。多くの論者がこのことを理解していない」〔一五五頁〕という。

オヴシエンコは、ドゥルジーニンが統計学の研究対象の存存を否定する場合、「幾つかの科学が、同一の客体を研究することができない、という誤つた見解から出發している」〔一五八頁〕と云う。そしてオヴシエンコは同一の対象でも、異なる側面を異なつた仕方て研究する他の科学がありうるとする。結局そのところは、「統計学は社会生活現象・過程の数字的解明を与える」というのである。

この「数字的解明」の意味であるが、オヴシエンコによれば、「ドゥルジーニンは統計学のもつとも本質的な特質の一つをみていないのだ。それは統計学には、抽象的な数はなく、数一般の概念はないということである。統計数値はつねに、具体的であり、一定の質と結びついている」〔一五九頁〕とし、統計指標の質的内容を強調する。以上要するに内容的には既に出た論点のくりかえしである。これによつて明らかことは、オヴシエンコ自身が、われわれの概念をもつてすれば、統計学Ⅱ社会科学方法論の見地に立つて発言しているということである。

ドゥルジーニン批判はこのほか、たとえばニーシチイ「統計学の対象と方法の問題によせて」〔33〕（S. 66）など

によつておこなわれているが、いづれも既出の論点に帰しうる。よつて論点提示はこれで打ち切る。

#### 四、プロシユコの見解と私見の要約

私見を要約する前は、なおプロシユコの見解を見ておくのが有利である。ただしプロシユコもまた統計学Ⅱ実質社会科学説に反対して、「統計学Ⅱ統計的計算の理論」を主張しているからである。彼はその論文「統計学の対象について」〔31〕において、統計学を「統計的計算の理論」と定義するのが正しいと主張している。彼によれば統計学の対象は、社会的労働の特別の形態として分離独立した統計的計算過程Ⅱ社会認識を目的とする人間の組織的活動過程（われわれの言葉をもつてすれば、統計方法過程の人的・物的側面）であるとする。この定義はべつだん新しいものでない。しかしこの見地からの統計学Ⅱ実質社会科学説批判は、ドウルジーニン批判に対する反批判としての意味をもちうるものと思う。よつて以下にその概要を示す。

彼によれば、論争過程で統計学の対象についての主要な見解は二つあらわれたという。一つは「特有の運動形態」論で、それは結局は、自然現象と社会現象の多くのものにみられる変異を思考基地にしているもので、統計学の対象は「統計的」運動形態、その諸「合法則性」だという見解である。ピサレフ、ネムチノフ、ある点ではストルミリン等がこれに属するという。プロシユコはこれを、統計学の基礎を大数法則と確率論に求める見解の現代の変型にすぎぬとみる〔31〕〔35〕〔論点一〕。

もう一つの見解は、統計学の対象を、社会生活の合法則性とする見解である。プロシユコによれば、統計学の対象として社会を前面におし出す場合、附帯してかならず解決しておかねばならぬ問題があるとする。それは、統計学と史的唯物論、経済学、その他、との区別を何処にもとめるかの問題である。この問題で、この社会科学説も二つのグ

ループにわかれるという。一方は実質上、方法の側に区別を求めるグループ〔社会科学方法論説〕であり、他方は対象の側を質と量にわけて区別を求めるグループ〔実質社会科学説〕である。前者に属するものはチエルメンスキー、ドミトリエフ、デブネル、ソーボリ、ある点ではオストロウモフ、であるとし（既にみたごとくオヴシエンコも当然にこのグループにはいる——筆者）、後者の代表者はコスロフである、という。

先づ前者の見解に対するプロシニコの批判からみる。プロシニコは先づチエルメンスキーの「ソ同盟中央統計局の統計技術学校用統計理論プログラム」〔1〕において与えられた統計学の対象についての定義をとりあげる。その定義は「統計学——社会科学——は、社会・経済現象と過程、それらの類型および形態を研究し、それらを数字資料で表現する。その数字資料は、社会経済関係の全面的分析に基づいて、所定の様式で集められ加工される」〔1〕（S. 6）としている。これは統計学が他の社会諸科学と同一の対象を、別様に研究するということであつて、区別を対象側に求めているのではなく、方法側に求めている、とする。

プロシニコによれば、独立科学は対象の独立性に基づくものであり、また、方法の差異は研究対象自体の特質にねざしているとする。そうだとすれば同一対象・同一法則につき異種多様な方法の存立は考え得ない。同一対象を経済学と統計学が別様に研究するというに基づいて、統計学が「独立」科学を組織する権利はない、としている。

ソーボリは「統計理論の最も重要な問題は、社会・経済現象の研究プログラムの作成・検討であり、これらの政治経済現象をあらわす統計指標体系の設定である」〔11〕（S. 66）としている。これに対しプロシニコは、ソーボリは純然たる方法論的な問題を中心課題としてしていると指摘する。ところが、このソーボリ、チエルメンスキー等のグループは、実質上方法論的な見解を一貫して押し進めることなく、途中から、対象側に区別を求める見解に移つて行く（1）とプロシニコはその移行を指摘する〔31〕（S. 57）。

そこで第一のグループ「社会科学方法論説」は結局、第二のグループ「実質社会科学説」に合流してしまふ。第二グループは、対象の質と量の区別に基づいて統計学の独立性を主張する。この見解の代表者コズロフに対し、プロシユコは次のごとく批判する。ユズロフの定義によれば、「統計学は、社会発展の種々の段階に生起する社会現象・過程の、具体的な数値的な相互関係および水準（大きさ）に関する科学である」〔20〕（九頁）。用語は「数字による特徴づけ」とか「数字による解明」とかいろいろあるが、本質は同じであつて、結局は、社会現象・過程の量的側面を統計学に割り振る主張である、とプロシユコは指摘する。

同一対象の質的側面と量的側面を、一方を経済学に他方を統計学に割り振るこの定義は、外見的には問題を解決しているように見えるが、外見だけで、実は問題は未解決だ。なぜならば、統計学の対象が社会過程の量的規定性だとすることは、それは他の社会科学によつて捉えられず、また研究されないことを意味するものでなければならぬ。もしその他の社会科学も量的側面を捉え研究するとするならば、それを区別する意味を失う。ところが経済学は社会的生産過程の量的規定性をはなれては進みえない。経済学の法則自体が、必要要件として量的定義を含んでいる。社会主義社会について云えば、つりあひのとれた発展の法則を、資本主義社会について云えば、平均利潤率の法則を、思い起すだけで充分だ。したがつて原則的な意味では社会生活の量的側面だけが、特別の社会科学＝統計学の対象とはならない〔31〕（55頁）、とプロシユコはいふ。

次の意味であるならば、統計学の対象として社会過程の量的側面を前面におし出すことも可能である。すなわち、対象の物的本質をあらわしている法則とはちがつた意味の合法則性に量的側面がしたがうという意味においてであるならば。ところがコズロフ等は、このような「統計的」合法則性の存存を認める見解にいくども反対してきた。しかし量的側面を独立に前面に押し出すからには、大数法則に基づく対象の量的規定性と、その質からの「独立性」とい

ふ命題が保持されていねばならぬ筈である。つまり大数法則が秘められた形で統計学の定義の底におかれている、とプロシユコは指摘する(S.58)。

プロシユコによれば、コズロフ等の考えは結局において、「統計的」合法性を認める考え方の裏がえしに過ぎぬものとなる。これは統計学の問題全般の解決に当つて重大なあやまりを伴なう。プロシユコによれば、「統計学の基本的課題は、統計分析法論の検討である。それは統計的計算資料の信頼性を確保し、科学的有意義性を保証するものでなければならぬ」[31](S.68)が、コズロフ等の見解は、この課題の重要性を見うしない、統計学によつて経済学を代行せしめ、統計学にとつて力量不相応な「歴史的に具体的な社会現象過程の量的変化」の中にあらわれる「社会発展の合法性」を確定する[20](七頁)という課題にすりかえている。これにより、統計学は、他の社会科学の代用品に転化し、独立の存存理由のない一つの経済学に転化する。かくして、第二グループのコズロフ等の、統計学の対象規定も失敗に帰している[31](S.68)、とプロシユコは批判する。

プロシユコによれば、統計学の対象規定に成功する要件は、統計(統計的計算)と統計学の概念を理論的に正確に定義することであるとする。しかしこれは日本においてはすでに論じつくされているので特別に紹介しない。したがつて以下、プロシユコの見解を批判しつつ私見を要約する。

× × ×

統計と統計学を区別すべきは、プロシユコの指摘をまづまでもなく当然であつて、学問の領域に外国語の混乱や常識用語の混乱を持ち込むべきではない。統計の対象と統計学の対象は当然区別すべきである。プロシユコによれば、統計とは「統計的計算」と規定すべきだという。そして「統計的計算」とは、(1)研究さるべきすべての事実をあますところなく把握すること、(2)情報蒐集だけでなく加工をもふくむ、(3)統計活動の全過程は組織的に統一されている、

としている。そしてそれは、社会過程の認識をその課題とする人間の組織的活動であり、統計的計算の対象としては社会が前面に出てくる「31」(38, 68)としている。しかし計算対象が何故に「社会」かはあきらかでない。

プロシユコ<sup>(3)</sup>の提起している(1)の「全面的把握」であるが、これは認識論の意味と統計技術の意味とをわけて考えねばならぬ。認識論の意味での全面性の要求は、ダンハムの指摘しているごとく、知識のための必要条件である。レニンも「関係あるすべてのデータを調査する」ことを強調するが、それは単なる統計技術の意味にかぎられていない。統計技術の意味では、「悉皆集団観察」等の悉皆性の要求となつてあらわれるが、プロシユコ<sup>(3)</sup>のいう「統計的計算の悉皆性」とは、「計算対象をもれなく」という程度の意味であろう。統計的計算が(2)「加工」を含み、(3)「組織的統一」を要することはいうまでもない注意にすぎない。とにかくプロシユコ<sup>(3)</sup>のいう統計的計算とは、われわれの言葉をもつてすれば「統計方法過程」にはかならない。問題はこの方法過程の内容規定の仕方にある。

プロシユコによれば統計学を統計的計算の理論と定義することにより、(1)統計方法論、統計的分析の手段と方法の理論的検討を統計学の最重要部分として据えることができる、(2)歴史的に形成され統計機関・機構、統計活動の組織を問題とし得、(3)統計的計算の分野における実践的活動の経験を問題としうる。つまり統計学は「統計的計算」という研究対象を、「他のすべての社会科学から厳密に区別された自己固有の一定の研究対象」としてもつていて、とプロシユコ<sup>(3)</sup>はいうのである「31」(38, 61-2)。

プロシユコによれば、統計を「統計方法」と規定するのは、「正確なものと認めがたい」とする。統計方法ではなく「計算」方法と規定するのも一つの見解であろう。しかしいづれにせよ、内容的には「方法」過程の諸規定を意味する点において統計学Ⅱ社会科学方法論説の一形態に過ぎない。

プロシユコにみられるような、統計学の対象を「社会的労働の特別な形態として歴史的に分離独立した統計的計算

過程」「歴史的に特殊な形態をもつに至つた人間の実践的活動・機構」とする考方は、たしかに経済活動や行政活動とは質的に目的を異にする統計的認識活動を、統計学の独自の対象領域に指定しえたやうに見える。しかしその活動も結局は認識対象の知的反映活動にはかならないから、認識対象側からの規定性を捨象した活動形態のみに着目するならば、方法の技術過程の分析論または制度論にとどまらざるをえない。問題は、統計方法論をこのように活動形態論にとどめるか、それとも、統計方法の基礎規定としての社会集団論から統計方法論をうち立てるか、にある。私見によれば、ドウルシーニンやプロシユコのごとき規定の仕方では前者にとどまらざるをえないと考える。いわゆる旧来のドイツ統計学書は一般に、社会集団論につづいて、集団観察過程を、(1)統計調査 Erhebung (調査主体、調査機関、調査客体、調査方法、調査票、調査票の運用・機関・方法)、(2)整理加工 Bearbeitung (分類、集計、比較、平均、比率、系列、各種の表示法)にわかつて説くが、社会集団論の欠除したプロシユコの考え方は、その論理構造から当然に、わずかにこの方法の技術・機構を扱うにとどまらざるをえまい。

これに対し、同じく統計学の対象を「統計方法」とする見地に立つとも、統計方法過程を規定するものとしてのその内容の契機たる統計方法の成立基盤Ⅱ適用対象を重視する考え方は、統計結果Ⅱ統計指標・統計数値・統計資料・一般化統計指標(統計法則)の問題を統計学の中心課題とすることになる<sup>(3)</sup>。この見地をとつたとしても、統計対象たるいわゆる社会集団過程は、他の実質社会科学の対象に他ならないから、統計学を実質の意味での独立の社会科学と主張することは困難である。統計学は、社会科学方法論の従属的な一つの特種形態として位置づけるよりほかない。私はこの意味の統計学Ⅱ社会科学方法論の見地をとる。

統計学、統計方法、統計についての私見は、最も簡単には次のごとくである。

(1) 統計学の研究対象は統計方法である。

(2) 統計方法とは、社会認識の目的の下に、統計対象を統計結果として捉える過程の方法的諸規定の特殊な結合形態である。統計方法は統計対象と統計目的によつて規定される。

(3) 統計対象（統計方法の成立基盤である統計方法の適用対象）は社会集団の運動過程（社会集団過程または社会集団現象と略称）である。

(4) 統計目的（統計方法の適用目的）は、社会の具体的・数量的認識目的という以上に、一般的に規定することは困難である。ただし、統計主体のおかれている立場と条件によつてその課題は異なるからである。

(5) 統計結果（統計方法の適用結果）は一般に統計と呼ばれる。統計はその生産過程たる統計方法過程の段階経過によつて加工度と性格を異にする。しかし社会集団過程を数量的に反映するかぎりにおいて、いづれも統計である。

統計は社会認識の手段・用具である。しかし、統計結果は統計対象を反映すべきものであるが、統計対象から独立であり、統計対象なしにも存在しうる。ここに統計結果が統計対象と無関係に、単なる数値として、ひとり歩きしうる必然性があり、社会認識を誤らしめうる必然性がある。

プロシユコはコスロフ批判において、客観的に存存する対象または客体の認識・研究様式が方法とよばれ、すべての科学にとつての共通な方法が弁証法的唯物論であると主張している。そしてこうした基礎的・共通的研究様式と研究手段・用具を混同してはならぬとする〔31〕(S. 61)。以上のかぎりプロシユコの指摘のとおりである、と私も考える。統計方法は、唯物弁証法が「方法」であるという意味の「方法」ではない。統計方法は、断片的な個々の用具・手段・操作の特殊な結合形態である。統計方法はすでに諸手段の特殊な結合形態を備えるに至つてはいるが、史的唯物論との関係においては、それ自体が史的唯物論の床の中に定着されて初めて方法的機能を發揮しうる用具に過ぎない。

い。統計方法は、研究様式としての方法ではない。この点の確認がきわめて重要である、と私は考える。

統計方法は、その構成要素からみると、(a)概念手段・操作(抽象方法、論理的方法とも呼ばれる)、(b)記号手段・操作(計算手段・操作・方法もこれだが、数理解析手段・操作)、(c)観察手段・操作(集団観察も当然ふくまれる)、(d)実験手段・操作、(e)記述、表示、伝達的手段・操作、といった断片的な個々の用具・手段・操作の特殊な結合形態である。統計方法においていずれの手段・操作に中心的役割を認めるかにより、論者の統計方法の性格も異なってくる(観察操作中心の集団観察法——ドイツ系、記号操作中心の統計解析法——英米系)が、ここでは、断片的な手段・操作が特定の結合様式(史的唯物論、機械的唯物論、各種の形態をもつ観念論)の中に定着させられて初めて具体的にその方法的機能を發揮しうることを注意しうれば足りる。

統計方法の構成要素、統計方法の研究様式としての方法に対する関係、についての私見は一応示しえたと思うが、なお統計対象との関係についての私見を、ここで明らかにしておくのが便利であろう。統計学Ⅱ社会科学方法論には次のごとき攻撃がむけられる。たとえばオヴシエンコは云う、「統計学を方法の科学とみる論者たちはおそらくいうだろう。彼等は統計指標の実質内容を否定するものではない、と。……はじめに方法があり、つぎに指標、対象と。対象はそれ自身(客観的に)存存せず、方法を適用した結果としてのみ存存する。方法が対象を生みだす。……社会科学としての統計学の内容を解決する場合にも客観的ではなく主観的な立場から出発している。そして統計学はその目的、課題、ならびに研究すべき現象への接近において社会科学である、と主張する。これは重大な誤解である。研究目的のような主観的なものを科学の内容規定の基礎においてはならない。統計学が社会科学であるのは、それが客観的社会生活現象および過程を研究するからである。このような問題の解決のみが唯物論的である」[32](一五七八頁)と。つまりオヴシエンコは統計学Ⅱ社会科学方法論説をはじめから観念論的なものとして性格づけようとして

いるのである。

私見は、目的・課題、なるものがすべて「主観的」であり、存存する対象がすべて「客観的」である、というようなお題目を信じない。目的・課題は主観的でも客観的でもありうる。われわれはそれを客観的に規定すべく努めているだけである。方法に対する目的の關係はしばらくおき、方法に対する対象の關係について私見を明らかにするのがここでの問題である。

一般にわれわれは対象を、(1)われわれの意識とは独立に、客観的に存存する対象、(2)われわれの方法に対して与えられた対象、(3)われわれの方法によつて成立せしめられた対象、に區別して問題とする。われわれが統計方法の対象として問題としている対象は、その内容的側面、形式的側面、質的側面、量的側面の何れを重視するにせよ、何よりもまづ、(1)の意味ではあるが、それにとどまらない。その対象は、特定の方法——まだその内容・性格は問わない、任意でも唯一でもない一定という意味で特定の方法——に対して与えられた特定の対象なのである。つまり(2)の意味なのである。

統計学に即して問題とするならば、ソウエトの多くの論者は統計学の対象として「具体的な集団的社会現象」を考えている。その対象は私見によれば、統計対象であつて統計学の対象ではない。チエルメンスキー、ソーボリ等はプロシユコが指摘するように、はじめは統計方法を統計学の対象と考えていた(言葉の上での主張はともかく、実質上の内容からして)。彼等は統計対象たる社会集団過程を、統計方法の基礎規定として統計方法論内で追求することなく、(プロシユコの指摘の通り)、次の段階では統計学の対象として扱うことによつて、統計学を方法論から実質科学に昇格させた。私見はかかる対象の転位は誤りであろうと考える。

統計対象(統計学の対象ではない)が具体的な社会集団過程の量的側面であるという場合、それは経験的知識また

は社会科学理論を前提・方法とした対象規定である。それは特定の方法たる統計方法を前提・予想せずして可能な対象規定である。つまり「統計方法」の意識とは無関係に、客観的に存在する対象の規定なのである〔(1)の意味の対象〕。しかしそのような意味にとどまるかぎり、社会集団過程はいつまでたつても統計方法に対しても、統計学に対してても、無関係にとどまる。したがって他面、対象を具体的な社会集団過程の量的側面と規定するからには、その構造が必然的に要求する特定の方法を予想しているものと考へねばならぬ。つまり社会集団過程は特定の方法に対して与えられているのである。未だその特定の方法の内容を問わぬにしても、特定の方法との関係において与えられているである〔(2)の意味の対象〕。この意味においては、社会集団過程は(1)から(2)の意味にならねばならぬ。それは二重の意味の対象の運動であろう。すなわち、一つは、われわれの意識から独立に客観的に存在している対象が、既成の社会科学の理論によつて、意識に反映された対象になつた、という意味においてであり、他は特定の方法(統計方法)に無関係の対象が、特定の方法(統計方法)に対して与えられた対象になつたという意味においてである。

これを統計方法過程に即しているならば、統計対象は先ず社会科学理論(概念分析操作)によつて理論的・抽象的に規定されねばならぬ(1)の意味)ことを意味する。

しかしそれだけでは対象の内容理論的・抽象的規定が与えられただけである。それが統計対象たるためには、集団の構成形式たる単位と標識の規定、その存在形式たる時と場所の規定が与えられねばならぬ。つまり社会集団過程の(2)から(3)への運動は、統計対象の単位、標識、時、場所の四要素の規定が与えられることを前提・予想する。

社会集団過程の四要素の規定は、理論的・抽象に規定すれば足り、未だ観察のための規定を含まない。それはまだ観察以前の規定であるが、観察のためには、さらにそれを技術的・具体的規定とせねばならぬ。すなわち、社会集団過程の四要素の規定はさらに、社会集団観察の四要素として規定し直されねばならぬ。統計対象は以上のごとき諸規

定を経てはじめて集團觀察の對象として与えられたものとなる。

統計對象はさらに集團觀察を実施され、その結果として集團觀察によつて成立せしめられた對象〔③の意味〕になるのであるが、私がここに主張せんとすることは、要するに、對象（理論）が方法（理論）となるということであり、また、そうした方法（理論）が研究の對象となるということであつた。かかる見地から以下、統計学Ⅱ社会科学方法論に対し提示されている批判論点に対する私見をのべる。

×

×

×

(1) 社会科学方法論は普遍科学説の変型に過ぎぬとする批判は、私見によれば一面的である。方法論は先ず何よりも對象の形式に係る。社會集團過程といえどもそれが集團たる以上、その形式的要件（単位、標識、時、場所）は、自然的集團および解析的集團とことなるところはない。常に形式が優位であるかの如く思ひなす形式数理主義の必然性はここにある。しかし、われわれはまさにその反対に、社會的内容の優位を主張した筈であつた。それにもかかわらず、形式的側面のみをとり立てて放つこのような批判は当らない。

(2) 社会科学方法論説は社會經濟的内容を抹消するという批判も、私見によれば(1)と同じく一面的である。もちろん方法過程そのものは、對象から切り離してそれ自体として問題としうる。方法論が常に方法それ自体を純粹に方法としてのみ問題とせねばならぬかのごとく思ひなす方法論主義の必然性はここにある。われわれはそうではなく、方法は常に對象のうちに見出されねばならぬとした筈であつた。

(3) 社会科学方法論説は統計方法をひそかに唯物弁証法におきかえんとする批判は当らない。われわれは断片的な用具・手段・操作としての方法と研究の基礎的様式としての方法を明確に区別した。統計方法は史的唯物論または唯物弁証法の要素として方法的機能を果しうる。統計方法の科学的検討の容認は唯物弁証法の否定を意味するものでな

く、また、唯物弁証法を唯一の決定的な科学的認識方法と認めることは、統計方法の科学的検討の否定を意味するものでもない。このことは、プロシユコ指摘している「31」(S. 61)とほりである。

(4) 社会科学方法論説は統計資料を含みえないとする批判は当たらない。けだしわれわれは既にのべた方法論主義の見地をとつてはいないからである。統計資料は集団観察過程の終点・結果であり、統計利用過程の始点・資料なのである。まさに統計方法過程の中心に位して、社会集団過程を特定の形態で反映すべきものである。

(5) 社会科学方法論説では現実分析に当りえないとする批判は、統計資料による現実の経済学的分析は経済学の仕事で、統計学の仕事ではないとするものであろう。私見は、研究が統計資料によるかぎり、統計学の発言権はあるものと考ええる。それどころか、方法は現実分析に適用してこそ、方法が問題となつたその本来の実践的動機に立ち帰るものであり、方法の本来の意義をとりかえすものである、と考える。

(6) 社会科学方法論説が客観的合法則性否認思想に根ざしているとする批判は、常に必ずしも当たらない。けだし、方法論説は正しくは客観的合法則性の存在の確認の上にこそうち立てられねばならぬものだからである。しかし方法が、目的意識的な実践の知的活動の一形態であり、認識の形式をさすものであるかぎり、常に觀念論化の契機を伴なっていることを否認しない。

(7) 社会科学方法論は未解決の問題を議題から外すという指摘がある。未解決の問題とは何かが問題であるが、最も決定的な問題は統計学を実質社会科学とした場合の、統計学と経済学との質的区別の問題であらう。統計学を社会科学方法論と規定するならば、この問題は一応解決しえたかのごとく見える。

ドゥルジーニンやプロシユコのごとく、経済活動や行政活動とは目的を異にする統計的認識活動の活動形態を統計方法論の内容とするならばともかく、われわれのごとく、社会集団論を統計方法論の基礎規定とする場合、つまり外

見的主張のかぎりドゥルジニン・プロシユコと同じく方法論を主張するが、内容的にはコズロフ等の実質科学論と異ならぬ主張をしている場合、果して問題を解決しているのかどうか、問題を社会集団論に転位せしめたに過ぎぬのではないか。社会集団論は私にとつても未解決の問題として今後に残る。

- (1) プロシユコは見地の移行を指摘するにとどめ、個々に具体的にはあげていない。しかしたとえばソーボリについてみれば次のごとくである。ソーボリは一九五三年に、統計学の研究対象は具体的な社会現象・過程である。統計学はそれらの大いさ、拡がり、発展テンポ、具体的関係を確定する。統計的研究方法——統計観察、観察資料の総括と分類、平均・指数等の算定——は、科学としての統計学の対象によつて、統計学が研究する社会的現象・過程の本質によつて、全面的に規定される」(34) (一七一—一八頁)としている。ところが一九五四年三月会議では「統計学の対象は具体的な社会現象・過程である。統計学はその量的側面を質的側面との不可分の関係において研究し、社会発展の量的な合法則性を研究する」(39) (一七六頁)とするに至つてゐる。

- (2) 蠅川虎三、統計の基礎概念、統計利用の基本問題、第一章、一九三二、同、統計学概論、一九三四。  
(3) パロウズ・ダンハム、マルクス主義認識論、国際資料、No. 88 一九五七年六月。  
(4) 経済統計論における技術組織論的方向と対象反映論的方向の二つの方向の理論的性格については、V. St. Tzonev, Über den Gegenstand der Theorie der Statistik, Statistische Praxis 1967, Ht. 4, S. 67. の指摘がある。  
(5) 蠅川虎三、大量観察の理論の過程と統計の批判(統計利用における基本問題、一九三二、一四六—一六六頁)同、大量観察の理論的過程(統計学概論、一九三四、六四—七四頁)。

## 五、オ報告後(一九五五—一九五六)の方法論説批判と実質科学説

オ報告によつて統計学論争は表面上終了した。しかしながら普遍科学説の代表者ネムチーノフは一九五五年に「社会学と統計学」(47)を公表し、その運動形態論を基礎に、統計的合法則性の堅持を主張している。また、社会科学方

法論説の代表者ドゥルジーニンは、「統計学講義」〔45〕を公刊し、方法過程の分析論を基礎に実質科学論の見地をとらぬ、と公言している。これに対し実質科学派の主流は、一九五六年に、中央統計局著者集団の「統計理論」〔87〕を改訂再版し、学術会議選出のストルミリン等の著者集団はそのテキスト「統計学」〔51〕を作成公刊し、モスコー経済統計研究所著者集団はその「統計学一般理論教程」〔52〕を出版した。

ここでは紙数の都合により、ドゥルジーニンの「統計学講義」とそのコズロフによる批判〔46〕、およびストルミリン等の「統計学」をごく簡単にとりあげ、私見の補足的説明に利用する。

以下考察の主要点は次のごとくである。(1)統計対象たる「集団的社会現象」とは何か、(2)特殊な方法であるとする「統計方法」とは何か、(3)統計結果とされる統計の正体は何か(統計指標、統計数値、統計資料、一般化統計指標、統計法則、統計的経済法則)(4)統計学の内容と体系、とくに経済学との関係、を論者はいかに考えているか、の四点である。問題をさらにしほれば、統計学を実質社会科学とする場合、統計学と経済学の質的区別をどこに求めるか、という一点にしほりうる。

(1) ドゥルジーニン「統計学講義」(一九五五年)〔45〕と  
それに対するコズロフの批判〔46〕

統計学Ⅱ社会科学方法論説の代表者ドゥルジーニンは、オ報告後も依然として、その見地を維持して、そのテキスト〔45〕を書いている。その見地について統計学Ⅱ社会科学方法論を主張するかぎりにおいて正しいと私は考える。しかし、そのテキストで、現に与えている内容は、数理統計学の見地のものである。したがって私見によれば、その主張と内容は矛盾している。統計学Ⅱ社会科学方法論説は数理統計学の変型にすぎないとする論者に、まことによい実証材料を提供している。私は統計学Ⅱ社会科学方法論説のドゥルジーニンのごとき形式数理主義的理解に反対する

が、先ずわれわれの論点にしたがつてその主張をみよう。

(1) 統計対象。ドゥルジーニンにおける統計対象の把握はきわめて貧弱である。「方法を、その方法によつて研究される対象から切りはなしてはならず、また統計資料によつて特徴づけられる現象の量的側面をこれらの現象の質的側面から切り離してはならない。方法についての学説には、かならず、この方法の適用対象そのものについての学説もある程度ふくまなければならない」〔45〕（八四頁）としているが、ドゥルジーニンには「方法の成立基盤＝適用対象そのものについての内容理論（統計対象論＝社会集団論）はまるでない。ここにドゥルジーニンが単なる方法過程の分析論ないし数理手続論へ転落する必然性がある、と私は考える。

(2) 統計方法。統計観察組織、（第二講）、総括とグループわけ（第三・四講）、平均（第五講）、相対量（第六講）、動態系列（第七、八、九講）、指数（第一〇、一一講）、変異指標（一二講）、相關計算（一三講）、抽出観察（一四講）、グラフ（第一五講）、（ついでにつけ加えておけば、第一講は統計学の本質と意義〔邦訳あり〕〔45〕であり、第一六、一七講は統計学史に当てられている）であるから、ブルジョア統計学書の統計方法の説明と異なるところはない。というよりは、統計資料分析とくに相關計算のごときは完全に数理統計学の見地からのべられている。

コズロフも指摘しているごとく、ドゥルジーニンは「統計学の基礎はマルクス主義経済学と史的唯物論だ」〔45〕（八九頁）と正しい命題をのべながら、その「講義」ではそれらが基礎としてすこしも役立つていない〔46〕。統計方法のこのような形式・数理主義的取扱いに、私は反対である。

(3) 統計結果。集団観察の結果が統計資料であり、統計資料の分析・加工結果が、一般化諸指標であるわけだが、統計対象論の貧弱さは統計結果論の貧弱さを必然ならしめている。しかし、実質社会科学説と異なつて、統計結果の最終的なものとしての統計的合法則性を必要としない。この点ドゥルジーニンは論理的に一貫している。方法論説を

とりながら「統計法則」をたてる論者（例えば蜷川博士）は、その「法則」に事実の要約の意味しか持たせぬとしても、理想的到達点としての「大数法則」を立てているとみねばならぬ。それに比すると統計法則を統計学から完全に追放しているドゥルジニンの方法論は徹底している。

(4) 統計学と経済学。ドゥルジニンは「本講では、統計学は方法論科学とみなされ、社会生活の合法則性の具体的出現の研究（手続および様式）についての学説とみなされている」〔45〕（八五頁）とし、統計学Ⅱ実質社会科学に反対している。そして「統計方法の諸問題、つまり数字資料蒐集の規則と手続および数字資料の加工の仕方にかんする諸問題を検討することが、統計学とよばれる科学分科の内容である」〔45〕（八三頁、さらに詳しくは八八頁）とする。そして「統計学はこのように社会諸科学、なかでもまず第一に経済学が社会生活の合法則性の具体的出現を研究するときにもちいる手段なのである。真に科学的な現実認識は、すべて事実の研究に立脚しなければならない。……たとえば経済学の諸法則を知つていても、統計資料の形で事実をもつていなければ、具体的な国でのある時期の経済諸法則の作用をあきらかにし、これをしめすことはできない」〔45〕（八三頁）としている。

以上のごときがドゥルジニンの「統計学講義」の概略である。これに対するコズロフの批判は次のごとくである。コズロフはまずこの「講義」の批判基準を定める。それによれば、高等商業専門学校の講義であるからには、(1)理論水準は高くなければならぬ。しかし、理解し易い形態たること、(2)当該科学の主要内容が盛られていること、(3)理論上の最新の成果、実践上の進歩的経験に通じうるようにしてあること、(4)余分な細部に入り込んだり、同じことのくり返しを含まぬこと、隣接分科の教授プランと重複せぬこと、としている。この基準に照してみるとドゥルジニン教授の「統計学講義」は残念ながら不合格である、とコズロフは評価する〔45〕（S. 89）。

コズロフによれば、この「講義」は大体において、一九五四—五五年の「統計学一般理論教程の要綱」〔52〕（この批

判は〔39〕三三二—三三三頁〕に準拠しているが、統計解析は、数理統計学の見地からのべられている、としている。そしてドゥルジーニン是对象たる現象の社会・経済的分析が統計学でもつている決定的な意義を明らかにせず、むしろ統計問題の解明に有害な数理統計学的手法に比較的多くの注意を払っている、と。以上がコズロフのこのテキストに対する概括的批判である。以下、前記提示の批判基準にしたがつてコズロフの批判を簡単にみる。

(1) 「講義」の理論水準については、全く不満足であるとする。その理由は、この「講義」の大体の内容が、ドゥルジーニンの前著「統計理論」一九五四（商業学校用参考書）〔中国語訳、一九五五〕の再生に過ぎず、ドゥルジーニンのその前の著「統計理論初歩教程」一九四九と文字通り一致している。高商の「講義」の水準ではなく、その名の示すとおり「初歩教程」に過ぎぬ、というわけである。

(2) 「講義」の主要内容については、すでにみたが、それをドゥルジーニンが社会科学方法論の見地からのべていることに對し、コズロフは反對する。反對の論拠は、(a)「統計」概念はドゥルジーニンのように「統計方法」とのみ解すべきではなく、レーニンなどのように「統計資料」と解すべきだということ、(b)統計学が統計方法を問題にするにしても、その適用対象を認めざるをえないこと。たとえば集団觀察では、觀察対象、觀察単位、觀察標識を (SS. 14—15, 17, etc.)、平均量では事実の總体を (S. 48) 等。要するにコズロフは統計学の対象は、統計方法ではなくその方法の適用対象たる社会現象の量的側面だとする。ドゥルジーニンの統計学の主要内容は方法論だけになっているが、コズロフによれば、統計対象が統計学の対象となつて、独自の対象論を構成し、統計学の主要内容となるべきだとするのである。

(3) 「講義」における理論上の最新の成果と実践上の進歩的経験のドゥルジーニンのとり入れ方にコズロフは反對する。つまり一九五四年三月の科学會議で統計学の対象と方法が定式化されているにもかかわらず、ドゥルジーニン

はそれを「現在もつとも流布されている見解の一つにしたがえば、統計学は実質科学であり……」〔45〕（八五頁）といった調子で否認し去つてゐる。こうした見地からドゥルジーニンはロシアにおける統計思想発達史を歪曲し、統計方法学説の発展としてえがこうとしている、とコズロフは不満を表明している。しかしこうしたあくまで自己の見地の保持にとめるドゥルジーニンの態度については、コズロスと反対の評価も成立しえよう。

実践上の進歩的経験の取り入れ方についてコズロフは「講議」の重大欠陥として、統計に直接関係する党の指示文書の内容がすこしもとり入れられていないと批判している。数理手続論にとつて統計法規などは偶然的異物に過ぎぬは当然であろう。

④ 「講議」における重複や隣接科学との重複について、コズロフは、確率論の諸命題のくりかえしや、経済大学の教授プランとの重複（「講議」は高等商業専門学校のテキストであるから）を指摘し、学生の学習時間の合理化を主張する。

なお、欠陥は種々指摘されているが、この「講議」のプラス面としては、編集が概して綿密になつた点があげられている。しかしそれは些事であつて結局は、このテキストは、統計学にかんする学術会議でなしとげられた統計学の本質にかんする理解に基づいて作りなおされねばならぬ、とするのがコズロフの結論である。統計学の本質論争は、その正否はともかくとして、統計学の教科書問題とつながつてゐる。この点こそ、われわれ日本の読者もシカとうけとむべきことであろう。

(2) ストルーミリン、サビンス  
キー、ソーボリ、コズロフ 「統計学」一九五六年とそれに対する私見

この書は一九五四年三月の「統計学についての科学会議」の決議にしたがつて作成され出版された〔39〕（二三二—

二三四頁、二四二—二四三頁)。この書のソヴェト統計学論争に対する評価は次のごとくである。「この討議過程で、また会議の席上で、統計学の対象を規定する領域での誤りが最終的に克服された。統計学を独立の社会科学とみる見解が勝利した」〔49〕(S. 550)としている。そして(1)統計学の若干の手法を他の諸部門で手段として利用することとは、統計学を普遍科学または普遍的方法論とする広すぎる解釈を正当化す証拠にならぬ。(2)統計学を社会科学とする解釈は、統計学における大数法則の位地を正しく評価することを可能にする。(3)「一般統計理論」と「経済統計理論」を分離しておくか一緒にしておくかという論議は意義を失なつた。統計学の普遍主義的解釈から快別すれば、その時の実際に応じて解決されうる。(4)会議は経済家も数理統計学の知識を増す必要を指摘したが、原理上は、数理統計学を統計理論から明確に区別した。前者と後者の転置は普遍主義の再生を意味する〔49〕(S. 551)としている。そして会議は、共産主義社会建設の現段階でのソヴェト統計の一般的諸課題を明らかにして、統計家の主力をその解決に集中する方向にむけたとし、「ソヴェト統計学にとつて大きな積極的役割をはたし、ながくソヴェト統計学の発展と完成に影響するだろう」〔49〕(S. 551)と評価している。

このテキストの作成には、ストルミリン S.G. サビンスキー D.V. ソーボリ V.A. コズロフ T.I. の四人の責任編集者のほかに、ポストリコバ A.M. ペトロフ A.I. オブシエンコ V.E. スミルンスキー V.I. ガズーロフ A.I. ヤウゾフ N.N. ボヤルスキー A.I. が執筆者集団に加わり、チエルメンスキー V.D. が、協力している。そして、(1)科学会議の決議〔39〕(二三二—二三三頁、二四一—二四三頁)、(2)同盟中央統計局著者集団の「統計理論」〔37〕、(3)モスクワ経済統計研究所著者集団の「統計学一般理論」〔52〕、(4)上述の諸著についての会議で表明された批判的注意〔39〕が、利用された〔51〕(第四 S. 3)としている。ソヴェト統計学の動向に注意を払っているものにとつては、これだけで既にこの書の性格はほぼ推測できよう。この書の全体の構成は、われわれの言葉をもつてすれば、前篇が

「一般統計方法論」で後篇が経済統計論中心の「特殊統計方法論」と「統計（思想）史」である。そして第一部は第一章「統計学の対象と方法」（第一、統計学の対象と理論的基礎、第二、統計学とその他の科学、第三、統計学の方法、第四、統計学の階級的性格・統計学の篇別）、第二章は「統計指標体系」から成っている。以下われわれの考察点にしたがつて、このテキストの考えを紹介すると共に私見をのべる。

記述の便宜上、このテキストの与える統計学の定義を先ず示しておく。それは次のごとくである。「統計学——これは、独立の社会・経済的科学であつて、それに固有の方法によつて、国民経済、文化、および社会の政治生活の諸種の部門における、集団的社会現象の發展の具体的な水準、テンポおよびつり合いを研究する。統計学が社会現象のすべての多様性をその發展過程および相互関係において研究する主要な特別の方法としては、集団観察法と、各個の研究される・それらの總体の要素の典型的標識によるグループわけの方法とが、役立つ。社会認識の最も有力な用具としてのソヴェト統計の主要課題は、ソ同盟における国民経済の計画化の目的に役立つことである」(26, 15—16)と。

この定義はストルミルンが一九五四年の統計学の諸問題に関する科学會議で提案した定義と同じであり、またストルミリンの「統計学の定義にかんする問題によせて」[10]における定義と本質的には異なっていない。この定義について注目すべきは、中央統計局著者集団「統計理論」[37]などと異なつて、オ報告の公式定義を採用していないことである。その理由は明らかにしないが、ストルミリンなればこそこれだけの修正を加えうるのである。何れにせよ、修正の程度と理由は内容をみて具体的に知るより他はない。

(1) 統計対象。実質社会科学派は一般に、統計対象と統計学の対象を同視しているが、このテキストにおいても両者の区別は明白でない。しかし彼等はいずれも、統計方法の基礎規定としての統計対象の規定を争えようとしている。この点は、方法過程の分析・組織論にとどまる方法論派(ドゥルジーニン・プロシユコ)より勝れている点である、と私

は考える。

このテキストによれば、統計対象は「具体的な集団的社会現象・過程の量的側面」〔51〕(SS. 9-8)である。この規定の内容的把握に当つては史的唯物論と経済学が統計学の基礎である (S. 6) とするが、それは経済学的規定が統計学的規定に先行することを意味する。以下このことにつきこのテキストの解説をみる。

(a) 統計対象は集団的社会現象である。集団現象であるかぎり、それはその構成要素として個別現象をもつ。この個別現象の数が集団現象の大きさである (S. 6)。集団現象は個別現象と異なつた特性をもつ。その質的側面が確定されなければ量的側面も確定されない。質的側面とはある現象を他の現象から区別するところの「内在的本質および外在的標識の総体」(S. 6)である。このテキストが集団現象について述べているところを拾い集めると以上のごとくなる。これをわれわれの言葉をもつてすれば、集団現象の形式的構成要件は、個別的存在(単位)と集団性(標識)だということにはかならずぬ。ところで集団的社会現象も社会現象である。このような社会現象だけを統計学は研究する。このテキストでは社会現象と自然現象との現象的区別をほとんどのべていない(この区別は、ネムチーノフ「社会学と統計学」〔47〕に詳しい。)このテキストは「社会現象發展の本質と性格は、所与の社会構成体の客観的法則によつて決定される」(S. 7)と、それを決定する法則の側からのべている。

このようにそれを決定する社会(構成体の)法則の側から集団的社会現象をみるならば、当然に、統計対象に対して大数法則がいかなる関係にあるかを一般的に規定せねばならぬ。そこでこのテキストは大数法則の役割を次のごとくみている。「統計学に対する大数法則の意義は、その作用に依拠して、実際にゆるしうる範囲で、対応する統計指標を偶然の影響から解放することができるといふ点にある。けだし大数法則の作用によつて一定の条件の下での集団的過程の一般的結果が、実際に偶然の影響から解放されるからである。この場合、大数法則はけつして、社会現象の

發展水準をも變動をも、決定するものではない。それはただ、偶然的偏りの相殺の条件を明らかにし、それによつて社会集団の現象において客観的な作用を明るみに出すことを可能にする」〔49〕(p. 8)と。つまり大数法則の統計学における副次的役割をかなり強く認めているのである。

(b) 統計対象は具体的な集団的社会現象である。「統計学は、一定の国、一定の時の、現実の歴史的な過程のなかにある集団的社会現象の大きさを研究する。具体的な社会現象は、その大きさとその他の特性とが、異なつた国でまた異なつた年で、かなりにちがつてゐることがある。……統計学は具体的な集団現象を研究しつつ、時間と空間における現象の變化の具体的な合法則性を研究する」(p. 8)とこのテキストは述べてゐる。われわれの言葉をもつてすれば、客観的存在の根本形式たる時空の規定は、統計対象が客観的存在であるかぎり当然の規定である。それをこのテキストも述べてゐるまでであるが、以上により、社会集団規定の形式的要件たる、単位、標識、時、場所、という要素が与えられた。その説く内容は、われわれの諸規定と実質的に異なるものではない(むしろわれわれの諸規定の方が、理論的にはるかに整理されていると思ふ)。

問題なのは、具体的合法則性の概念である。このテキストは「統計学は時空における現象の具体的な合法則性を研究する」としてゐるが、時空の規定をはずすことのできない具体的合法則性とは何かである。一定の時空内における事実の要約結果を合法則性と呼ぶ場合、事実と法則の關係はどうなるか、である。かりに事実の要約結果を合法則性の概念に含めねばならぬとするも、そうした合法則性は社会(構成体の)法則といかなる關係にあるかが明かにされねばならない。(ネムチーノフ「社会学と統計学」〔47〕は、これについての見解を詳論してゐるが、その正否は別として、問題に切り込んでゐる点で高く評価すべきであらう。)

(c) 統計学は社会現象の量的側面を質的側面とのきり離しがたい結合において研究する、としているが、これは

当然の規定であらう。しかしながら「質的側面と量的側面が切り離したい結合において研究される」ということと「質的側面を扱う経済学と量的側面を扱う統計学が、それぞれ別個独立の実質科学である」ということとは、いかなる関係にあるのか論理的説明を要する。参考までにネムチーソフは次のごとく歴史的説明を与えている。

「自然の研究過程では両側面はわけることができない。これに対して社会現象の研究では、なによりも先ず現象の性質を質的に明らかにすることであつて、その量的側面を規定する必要があるとはかぎらない。歴史学、経済学、法学、等の社会科学は社会現象の質的な性質を対象としている。しかし社会生活が發展するにつれて、社会現象、過程の量的側面の認識が大きな意義をもつてくる。そして集団的社会現象の量的側面は特別の科学——統計学——の対象となる」〔47〕（一五六・七頁）と。なおそのほかこのテキストは、統計学が社会現象の量的変化におよぼす自然的要素や技術的要素の影響を研究する、等のことをのべているが、「統計理論」〔37〕（再版 S. 8）および「統計学一般理論教程」〔52〕（S. 11—15）の諸規定と異なるものでない。

② 統計方法。統計方法についてのソヴェト学者の説明は、いずれも大同小異である。その方法の経済学の方法に対する関係、および史的唯物論さらには唯物弁証法に対する関係、も必ずしも明確でない。先ずこのテキストの云うところをみる。

このテキストは「統計的研究の一般的方法」として次のごとくいう。「社会現象は人と人とのあいだの関係を表現する。それはけつして自然科学の諸方法によつては研究しえない。商品価値は、化学反応によつて明らかにしえないし、物理的用具によつても測定しえない。価値の測定は、社会的な価格形成過程のなかで実現される。統計学は、社会現象の量的側面の研究を、これらの現象の本質と性格から出発して実行する。統計学は、すべての歪曲をまぬがれた充分な結果をうることを可能ならしめるような、研究方法をつくりだす」（S. 13）と。（この解説よりも、一般的

研究様式と方法・手段の關係を示した中央統計局の「統計理論」の初版〔37〕の解説——再版で除去された——がはるかに勝れているように、私には思われる。）

この研究方法の具体的な内容は、(1)集団的・統計的・觀察、(2)總括とグループわけ、(3)その他の方法と手段、となつてゐる。(3)の内容は「一般化指標——平均と相對量——の算出、指數の計算、動態系列の作成と分析、異なつた統計的現象のあいだの關係の指標の計算、等がもつとも重要な、統計的研究の方法である。これらすべての分析手段は研究される材料の性質に応じて利用される」(S. 15)とされ、いわゆる普通の「統計調査↓統計↓統計解析」として定式化される統計方法過程における諸問題にはかならない。これらの「分析手段」はわれわれの言葉をもつてすれば断片的な研究手段・操作・手続であつた。これらは特定の研究様式・方法——歴史的唯物論、機械的唯物論、觀念論の各種の諸形態——の局部的過程に定着され、一般理論的過程のなかではじめて方法的機能を果しうるものであつた。

いかなる手段・操作・手続をもつて「統計方法」を構成するかは見解を異にしうる。また統計方法といつてもその組織・機構の側面と認識過程としての側面とがある。後者の側面についてののみ問題としても、種々なる手段・操作・手続がある。「統計的觀察操作」一つをとつてみても(「グループわけ」をとつても同じ)、その実施のためには、実施前に社会集團過程の理論的分析操作の問題があり(S. 12-13)、それは統計的觀察にとつて不可欠の操作である。すでにみたごとく、この操作によつて統計対象は統計方法に対して与えられるのだからである。

このテキストも「統計的觀察には、研究せられる現象の政治經濟学的分析が先行する」(S. 12)と、正しい命題をのべているが、それを集團觀察過程についていえば、統計対象の規定に際して、概念分析操作が集團觀察操作に先行することを意味するものである。しかしそれは、統計方法内に位置づけられた対象規定のための概念分析操作でなければならぬまい。ところが、このテキストにおいても、統計対象の理論的分析操作は統計方法外に追いだされ、統計方

法の対象ではなく、統計学の対象に転位せしめられ、統計方法論とは別個独立の統計学の対象理論であるかのごとく考えられている。したがって「統計方法」論には、統計観察以下の外見的に捉えうる操作形態のみが残されているに過ぎない。組織的な集団観察操作が統計方法の決定的要素であることを疑わないが、その他の記述・整理操作とともに概念分析操作は統計方法から除外しうるものであるまい。史的唯物論や済経学が統計学の基礎だということは、統計方法において概念分析操作が集団観察操作の基礎だということに他ならない。この意味において統計方法から概念分析操作部分を除外する傾向のあるこのテキストの統計方法概念に、私は疑問をもつわけである。

(3) 統計結果。統計結果は一般に「統計」と呼ばれ、その対象からも方法からも相対的に独立の生産物である。しかしそれはその経過した統計方法過程の段階によつて加工度を異にし、何れも、具体的な集団的社会現象過程の量的側面をなんらかの形態で反映している。

(a) 統計指標と統計資料。このテキストによれば、統計結果の記述形式は統計指標と呼ばれる。すなわち、「統計指標は、統計によつて研究される社会現象の量的側面を表現する諸概念である」(S. 28)、「統計指標は通常、表の形で記述される」(S. 28)と述べている。そして「統計指標」とその内容たる数値「統計数値」を区別せねばならぬとし、統計指標の数値は「統計資料」と呼ばれる(S. 28)としている。「統計指標の数値の時間的变化(または空間的变化)は対応する社会現象の発展ないしひろがりの合法則性をあらわす」とし「統計学は、史的唯物論とマルクス・レーニン主義経済学の規定に基づいて、統計指標の内容を検討・作成する」(S. 28)としている。

ここに統計指標の内容の検討・作成といわれているが、このテキストの一般的考え方によれば、それは「統計数値」の検討作成というよりも、統計指標という記述形式(表示形式)そのものの質的規定、つまり枠作りを意味していると考えられる。ただし、「統計理論の課題は、社会主義経済の内的可能性を反映する統計指標をしめし、科学的に基

礎づけることである」とし、「實際統計は、これらの諸指標を必要な信頼性と正確性をもつて、計算を実施することだ」(S. 34)としているからである。われわれの言葉をもつてすればこのテキストは、その各項の統計値が未知数で与えられるところの構成的統計系列の作成( $s_1, s_2, s_3, \dots, s_n$ )までを統計理論の問題とし、その未知数として残された統計系列の各項を既知数とする過程( $a_1, a_2, a_3, \dots, a_n$ )は實際統計の問題だ、としているのである。われわれはここにこのテキストの統計資料に対する態度をみることができる。

(b) 一般化統計指標。集團觀察結果つまり、われわれの言葉をもつてすれば、構成的統計系列ならびにその表示形式たる構成的統計表だけでは、「社会現象の發展の具体的合法則性をみつけ出すに不充分である。そのために統計学は社会現象の若干の特質を特徴づける誘導値を算出する。……このような一般化によつて具体的な合法則性が発見される。個々の統計資料を一般化し、合則法性をあきらかにするこのような統計指標は、一般化統計指標と呼ばれろ」(S. 28)とつづける。

このような一般化指標は「法則」という言葉を表面に出していないが、内容としては上述のごとく、「社会現象の發展の具体的合法則性」の表示形式なのである。然りとすればそれは形式数理主義の意味でないかぎりネムチーノフと共に「統計的合法則性」と呼びうるものであらう。内容的にみると社会性の稀薄化したこの種の「合法則性」を、統計学を数学と経済学とからわかつそれ自体の支柱とする考え方には難点がある。これについてはすでに言及したが、このテキストでも問題は依然として残されている、と私は考える。

(c) 統計指標体系。「社会生活のすべての現象は、相互に連関しており、それらの一つがある現象の結果であると共に他の現象の原因でもあるような有機的な全一体をなしている。統計学はこの全面的な相互制約性を反映して、たんに個々の現象だけでなく、それらの関連と相互制約性をも同時に反映するところの、統計指標体系をつくり出

す」(S. 28)とこのテキストはのべている。こうした指標体系は、国民経済の計画化と国の社会生活の指導の必要にこたえるとして、このテキストは社会主義社会の主要な統計指標体系(S. 28—31)を具体的に提示する。

このような指標体系は、国民経済総合バランスと共にまだ未完成であり、研究課題である。しかし二〇年前のストルミリンの「国民経済バランス論」(体系論)が今や再び老ストルミリンによつて「統計学」(方法論)において展開されていることは注目に値する。

(4) 統計学と経済学。このテキストにおける統計学の定義は既にみた。それによつて「統計学」がいかなる内容と体系をもつて組織され、他の社会諸科学に対していかなる関係・地位にあるかの概略は知りうる。がここでは他の諸科学との関係を少しく立ち入つてみる。

先づ統計学の本家争いを起し易い数理統計学との関係からみる。数理統計学と統計学の対象の差異をこのテキストは次のごとくのべている。「数理統計学は客観的世界のある個々の部門の特殊な性質とは無関係に、抽象的総体およびそれらを構成する客体の分布を研究するところの数学の一部である。数理統計学は、客観的世界のある部門にたいする事象の属性を捨象して、偶然事象の生起の抽象的確率を考察する。統計学は無機および有機的自然とは根本的に区別される社会現象だけの量的側面も研究する」(S. 12)。つまり両者の対象は、客観的世界の対象領域と抽象段階を異にしているのである。そして「数理統計学によつて研究される客観的法則は、社会生活にあらわれはするが、しかしそこで決定的な役割を演じない」とし、多くのブルジョア統計学者の間では、数理統計学が統計学の理論的基礎であるという誤つた考えが広く普及しており、彼等は、統計学は「確率論の社会現象への適用とみなしている」(S. 12)と非難している。このかぎり、私としてもとくに異論はない。

統計学と経済学の対象の区別については、このテキストは次のごとくみている。すなわち、

「経済現象にかんしていえば、統計学は経済学が研究しない側面を研究する。この問題を統計学および経済学が研究する賃銀の例で考えよう。経済学は、種々の社会・経済構成体における賃銀の本質と発展法則を研究する。たとえば、社会主義経済学は社会主義社会の賃銀の本質を確定し、社会主義社会の発展過程における賃銀の変動の法則を明らかにし、社会主義社会の他のカテゴリーと賃銀との関係と相互作用を確定する。統計学は具体的現実において、いかに賃銀が形成されたか、そしてその発展の具体的合法性がどうかを研究する」(S.10)と。そして統計学と経済学の対象のちがいの正しい理解には、マルクスの教えが役立つとして、例のマルクスの地代の理論を引き合いに出し、経済学に「可能性」を、統計学に「現存性」を割り当てる<sup>(3)</sup>。

なお「国民経済史、経済地理学、及び国民経済の個々の部門の経済論のような社会科学は、経済学と密着している。統計学とこれらの諸科学との差異は統計学だけが、具体的社会現象の大きさを独立に確定するということにある」(S.11)と云うところは結局、統計学と経済等の対象は同一であるが、そのちがいは、対象の質的區別にあるのではなく、むしろ研究の仕方に、つまり具体・抽象の程度・段階の差別にある、ということになる。

これは、統計学に「対象の量的側面と具体的統計方法」を、経済学に「対象の質的側面と抽象的分析方法」を割り当てて割り切る才報告〔43〕、中央統計局の「統計確論」〔37〕、モスコフ経済統計研究所の「統計学一般理論教程」〔52〕の割り切り方に比べれば、このテキストの割り切り方はアイマイになつたといふことができる。しかし統計学の実質科学性を強調しないこのテキストが、むしろ正しさに一歩近づいたのではないか、と私は考える。

すでにしばしば言及したごとく、「抽象的分析方法」は研究様式としての方法ではなく、断片的な研究手段・操作・手続の一形態にすぎない。概念分析法が、いかに重要な基礎的な研究手段であろうとも、それは経済学の研究様式としての方法にとつて代りうるものではなからう。それと同様に、統計方法は統計学の方法ではなく、統計学の研究対

象であつて、それは一連の研究手段・操作・手続の特殊な結合形態である、とするのが私見である。

- (1) ストルミリン他、「統計学」〔51〕の目次の大見出しのみあげる、第一部、社会科学としての統計学（第一―二章、第二部、統計学の一般的カテゴリーと方法（第三―十一章、第三部、人口、保険、文化統計（第一二―十四章）、第四部、国民経済統計（第一五―二一章）、第五部、祖国統計史からの若干の情報（第二二―二十四章）。
  - (2) ストルミリン「国民経済バランス論」計画経済誌一九三六年九、一〇号（邦訳、政治経済研究所、ソ同盟計画経済の方法論、一九四八、なお、この関係・文献は、木原正雄編、再生産と国民経済バランス論、一九五七。
  - (3) マルクスからエンゲルスへの手紙、一八六二年、八月九日、附、邦訳、岡崎次郎訳。
- マルクス・エンゲルス「資本論に関する手紙」、法政大学出版局、一九五四、一一六―一二七頁。

## む す び

統計学Ⅱ社会科学方法論の見地は、(1)経済学との質的差別を明確にしうる点において理論的整合性を確保しえ、(2)社会集団過程の具体的数量的認識過程を明確にすることにより、現実反映性を確保しえ、(3)社会認識の有力な実際のおよび理論的用具の提供により、実践指導性を確保しうるもの、と私は考える。かかる見地において、私見は経済統計論を次のごとく構成する。

### 統計方法の意義と限界

- (1) 統計学者の経済学の問題意識の検討。
- (2) 各派経済学書における統計資料と統計方法の検討。
- (3) 日本における経済統計論の発展・現状・課題。

### 統計方法の適用

- (4) 戦後独占資本の状態と政策の研究における統計資料と統計方法の検討。
  - (5) 戦後労働者階級の状態と運動の研究における統計資料と統計方法の検討。
  - (6) 日本資本主義の運動法則の研究における統計資料と統計方法の検討。
- 以上、整理のゆきとどかない草稿の提出となつた。論理的整序作業は読者と批判者に一任せねばならぬ。

——松岡孝兄先生追憶のために——

ソヴェト統計学論争関係論文・著書・報告・等・一覽(自一九五〇年至一九五六年)

この目録は「統計通報」(V. S.)誌、「経済学の諸問題」(V. E.)誌、「その他」につき、発表時順に配列してある。拙稿中の引用はこの頭部の番号で示した。拙稿ではこの番号の次に頁を示すが、邦訳あるものは、邦訳の頁によつた。ただし、引用文は必ずしも邦訳によつていない。なお邦訳のないものは論文・著書・の原文の頁である。

——一九五〇(V. S. 誌のみ)——

- [1] チェルメンスキー V. ソ同盟中央統計局統計技術学校用の統計理論にかんするプログラムについて V. S. 1950, No. 1. [独訳(抄) Statistische Praxis, 1951, Ht. 1, S. 9].
- [2] ミンイロフ, N. 統計学にかんするマルクス・レーニン主義学説の歪曲に反対して V. S. 1950, No. 1.
- [3] 無署名巻頭論文、マルクス・レーニン主義統計理論のために V. S. 1950, No. 2.
- [4] ドミトリエフ, A. 統計学の対象と方法にかんする問題によつて V. S. 1950, No. 2.
- [5] パルティゲル, S. マルクス・レーニン主義統計理論の歪曲に反対して V. S. 1950, No. 2.
- [6] 雑報、ソ同盟中央統計局における方法論会議 V. S. 1950, No. 1. [邦訳、経済統計研究会訳編「ソヴェトの統計理論」一九五三年刊、一六二—一七八頁、American Statistician, No. 3、一九五二年度の重訳、独訳は Theoretische Grundlagen der sowjetischen Statistik, Statistische Praxis, 1950, Ht. 11, SS. 175-179.

- [7] 雑報、統計学の対象と方法にかんする問題についての協議会（一九五〇、一一、キエフ財政経済研究所におけるもの）V.S. 1950, No. 6.

—一九五二（V. S. 誌のみ）—

- [8] デブネル、N. ソヴェト統計学の対象と方法について V. S. 1951, No. 4. [邦訳（抄）] 経済統計研究会、東ドイツの統計理論 II、一九五四、七、四六—四九頁、独訳よりの重訳、独訳は Statistische Praxis, 1952, Ht. 11, SS. 199-200.
- [9] ミハイロフ、N. 統計理論の二、三の問題について V. S. 1951, No. 6. [独訳（抄）] Der gesellschaftliche-ökonomische Charakter der Statistik, Statistische Praxis 1952, Ht. 6, SS. 98-94.

—一九五二（V. S. 誌と V. E. 誌とを併用）—

- [10] ストルーミリン、S. 科学としての統計学の定義に関する問題によせて V. S. 1952, No. 1. [邦訳（抄）] 科学としての統計学の地位、経済統計研究会、東ドイツの統計理論 II 一九五四、七、三六—四六頁、独訳よりの重訳、独訳（抄） Statistische Praxis 1952, Ht. 9, SS. 165-168.
- [11] ソーボリ、V. 統計理論の二、三の問題 V. S. 1952, No. 2.
- [12] ミハイロフ、N. 統計学の二、三の問題 V. S. 1952, No. 3.
- [13] オストロウモフ、S. ソヴェト統計学の対象と方法にかんする問題によせて V. S. 1952, No. 3.
- [14] ススロフ、I. 統計学の対象と方法について V. S. 1952, No. 4.
- [15] シウリギン、I. 統計学の対象と方法にかんする問題によせて V. S. 1952, No. 4.
- [16] スタロフスキー、V. 共産党第一九回大会とソヴェト統計の任務 V. S. 1952, No. 5.
- [17] カガノヴィッチ、I. 科学としてのソヴェト統計学にかんする問題によせて V. S. 1952, No. 6.
- [18] ピサレフ、I. 同志チエルメンスキー、ミハイロフ、ソーボリのまがいた論文について V. S. 1952, No. 6.
- [19] チエルメンスキー、V. 統計理論における深刻なまがまりと混乱に反対して V. S. 1952, No. 1.
- [20] コズロフ、I. 統計学の対象と方法の問題について V. E. 1952, No. 4. [邦訳] 経済統計研究会編、ソヴェトの統計理論 II、一九五三、所版 [独訳] Sowjetwissenschaft, 1952, Ht. 2, SS. 177-192.
- [21] ドルジョニン、N. 科学としての統計学の内容について V. E. 1952, No. 6. [邦訳、同上] [独訳] Sowjetwissenschaft.

- 1952, Ht. 3, SS. 325-337.
- [22] ケンシール、L. 科学としての統計学の二、三の問題、V. E. 1952, No. 7. [邦訳、同上] [独訳、Sowjetwissenschaft, 1952, Ht. 4].
- [23] ユサノフ、I. 統計学の対象と方法の問題について、V. E. 1952, No. 8. [邦訳、同上] [独訳、Sowjetwissenschaft, 1952, Ht. 4].
- [24] チホルメンスキー、V. 統計学について、V. E. 1952, No. 9. [邦訳、同上] [独訳、Sowjetwissenschaft, 1953, Ht. 1, SS. 43-54].
- [25] ネムチーノフ、V. S. 科学としての統計学、V. E. 1952, No. 10. [邦訳、同上] [独訳、Sowjetwissenschaft, 1953, Ht. 2, SS. 303-319].
- [26] ラコノヴァ、P. 統計学の対象と方法について、V. E. 1952, No. 11. [邦訳、同上] [独訳、Sowjetwissenschaft, 1953, Ht. 3, SS. 452-461].
- [27] ペトロフ、A. I. 経済統計学教程、初版、一九五二、再版、一九五四 [独訳は初版より Grundriss der Wirtschaftslstatistik, 1954, 再版より中国語訳、一九五七、再版より日本語訳、一九五七]
- 一九五三 (V. S. 提言 V. E. 提言) ——
- [28] グレイウイチ、S. 統計学の対象の問題によせて、1953, No. 1. [邦訳、経済統計研究会討議資料、No. 3, 1954, 11月刊]
- [29] コズロフ、T. 統計理論の二、三の問題について、V. S. 1953, No. 1. [独訳、Sowjetwissenschaft Ht. 1953, Ht. 3, SS. 416-474].
- [30] ボヤルスキー、A. 統計学の対象の問題によせて、V. S. 1953, No. 2.
- [31] ブロンシュコ、B. 統計科学の対象について、V. S. 1953, No. 2, SS. 55-62.
- [32] オヴシエンコ、V. 科学としての統計学にかんする問題によせて、V. S. 1953, No. 3. [邦訳、経済統計研究会訳編、ソヴェエトの統計理論、II、一九五三、一四六—一六一頁]
- [33] 統計学の対象と方法にかんする問題についての諸論文の概観、V. S. 1953, No. 3.
- [34] ソーボリ、V. 統計学の対象について、V. S. 1953, No. 4. [邦訳、経済統計研究会、東ドイツの統計理論、II、一一—一九頁]

独訳 'Statistische Praxis, 1953, Ht. 11, SS. 177-181).

[35] ピーサレフ、I. 経済統計学にかんする新しい教科書「ペーロフの経済統計学教程」V. E. 1953, No. 9.

[36] ガズーロフ、A. I. 経済統計学、一九五三。

[37] 中央統計局著者集団、(ボストリコバ編) 統計理論、初版、一九五三、再版、一九五六 (独訳、オストロヴィチャノフ報告を第一章とし、初版の第三章以下の前編の大部分を合せて Arbeits- und Forschungsmethoden der Statistik, 1955 として出版している。中国語訳、統計理論、初版、一九五五、増訂第二版、一九五七)

— 一九五四 (V. S. 誌、V. E. 誌、その他) —

[38] 巻頭論文、統計学のいつその創造的發展のために「V. S. 1954, No. 5.; V. E. 1954, No. 11. (内容は「邦訳、オストロヴィチャノフ、K. V. 統計学にかんする論争の結果によせて」(経統研「統計学」一九五五、九月、第二号)ノ同盟・科学アカデミア通報、一九五四年、第八号、所収のものと同じ。独訳は Statistische Praxis, 1954, Ht. 11, SS. 157-162).

[39] 統計学の諸問題にかんする学術会議の概観 V. S. 1954, No. 5.; V. E. 1954, No. 12. (邦訳、有沢広巳編「統計学の対象と方法、一二九—二四三頁」)

[40] イエドキーモフ、V. リャウゾフ、N. 有益な授業用参考書「ガズーロフ、A. I. 「経済統計学」」V. S. 1954, No. 4.

[41] ペトロフ、A. I. 編「経済統計学教程の中央統計局における審議」1954, No. 1.

[42] 「統計理論」のモスクワ経済研究所における審議「V. S. 1954, No. 6.

[43] オストロヴィチャノフ、K. V. 統計学にかんする論争の結果によせて、ノ同盟科学アカデミア通報、第八号、一九五四 (独訳、Statistische Praxis 1954, Ht. 11. 邦訳、経済統計研究会「統計学」第二号、一九五五年九月、所収)

— 一九五五 (V. S. 誌、他) —

[44] 科学的検討を要する統計学にかんするテーマの概括「V. S. 1955, No. 2, V. E. 1955, No. 1. (一九五四年五月二八日の共同決議に基づいて準備された実地的なテーマ)。

[45] ドゥルジーニン、統計学講義、一九五五 (邦訳は第一章のみ、経済統計研究会「統計学」第四号、一九五六年十月刊)。ドゥルジーニンには別に、統計理論初步教程、一九四九。統計理論、一九五四、(中国語訳、一九五五)がある。

[46] コズロフ、T. ドゥルジーニン N. K. 教授著「統計学講義」V. S. 1955, No. 6.

- [47] ネムチーノフ、V. 社会学と統計学、哲学の諸問題誌、一九五五年、第四号〔邦訳、現代ソヴェト哲学、一九五六年版、所収〕
- [48] ソ同盟科学アカデミー（ネムチーノフ編、統計学紀要、第一巻、一九五五〔I 指数理論の諸問題、II 大数法則、III 諸報告〕、第二巻、一九五六は工業調査における統計方法）〔邦訳は第一巻、III の論文の一つ、ストルーミリン、ソ同盟の国民経済バランス表式あり。木原正雄編、再生産と国民経済バランス論、一九五六、所収〕
- [49] 統計学、経済計算、管理組織〔ソ同盟図書年鑑、一九五五年、第一巻、第X部、(S. 40) 一九五六年刊〕（一九五五年については第一巻しか見ていないが、この図書年鑑と、メジ・クニガの「ソヴェト図書」およびV. S. 誌掲載の発行図書目録により、ソ同盟における統計学書単行本の刊行書目は、ほぼ見落しなく知りえよう。）（なお雑誌論文名を知るには The Library of Congress, Monthly list of Russian accessions が便利である。）

—一九五六(V. S 誌 他)—

- [50] スタロフスキー、V. ソ同盟共産党第二〇回大会とソヴェト統計の課題、V. S. 1956, No. 2〔邦訳、統計研究会、外国統計研究資料、六三号、一九五六年一月刊〕〔44〕と同系統のもの。
- [51] ストルーミリン、サピンスキー、ソーボリ、コズロフ、統計学、一九五六年六月〔中国語訳、一九五七年刊〕。
- [52] モスコワ経済統計研究所著者集団（コズロフ、オブシエンコ、サピンスキー、スミルンスキー）統計学一般理論教程、一九五六年八月〔中国語訳は一九五七年刊〕。